燕石十種

三十七、三十八

081
10
21

ガラス使用

燕石十種

四輯　七

よ
61
3

東京圖書館

和書門	叢書類	~~二十~~函	六架	一五號	六〇冊

29. 2. 27

ガラス使用

燕石十種第四輯　巻七

相撲傳書

江戸書肆　活東子輯

東京圖書館藏

東寅文庫

序

夫武備之業劔鎗矢石組打ノ之
習練有二繁多一就レ中離下至二組打一ニ者テハ
釼鎗上ヲ唯以二四肢心體ノ之得失一ヲ方ニ
至ル二生死之境一ニ識ル二危戰ノ之節目一武
備ノ之精要也于爰相撲者戰術
組打ノ之一助トメ而用ヒ來ルヿ舊ヒサシクス二其例一ヲ矣

ガラス使用

是則平時練武謂也今此書者
古今相撲有功之敎形猶亦戰
具之組合眞劍之中（アタリ）各集相撲
之家傳故號角力（スマフ）傳書矣

享保寅曆初夏

木村柳悦
守直撰

本朝相撲之始

日本書紀第六

垂仁天皇七己巳朔乙亥左右奏して言く當麻（タエマ）の邑に悍士（カンシ）あり當麻の蹶速（ケハヤ）といふ其人力強して能角を毀（サキ）鉤（カキ）を申（ノブ）恒（ツネ）に衆中（ナカ）に語ていはく四方を求めに豈我力にならぶものあらんや何（イカデ）強力のものにあひて死生をいはず頓（ヒタフル）にちから争（クラ）べせむると願に天皇聞て群卿に詔（ミコトノリ）て曰く朕聞當麻の蹶速は天下の力士也若此にならぶる人ありや一の臣進（テ）言く臣聞く出雲國に勇士あり野見宿禰といふ試に此人をめして蹶速に當せむと欲ふ即日倭直（アタヒノ）祖（トホツオヤ）長尾市（チ）を遣（シ）て

ガラス使用

野見ノ宿祢を喚（メス）こゝによつて野見ノ宿祢出雲より至（イタリ イタリツ）て當麻蹶速と野見ノ宿祢をして捔力を取らしむ二人相對して立合各足を擧て相蹶（フムトキ）則ち當麻ノ蹶速が脇骨を踏ふて折ける其の腰を踏折（クジキ）これを殺す故に當麻蹶速が地を奪し悉ク野見ノ宿祢ニ賜ふ是以（ヲテ）その邑に腰折田の縁に有り野見ノ宿祢乃留（イマシイ）り仕へまつる

垂仁天皇三拾二年秋七月野見ノ宿祢埴人形を造り殉死ノ代ニ天皇厚ク野見ノ宿祢が功を賞賜ひ土部（ハジ）の職に任じ因（ヨツテ）本の姓を改て土部の臣（オンド）といふ是土部の連（ムラジ）等（ラ）が始の祖也

人皇四拾五代聖武天皇天平元年六月廿五日土部（ハジ）を改て菅原の姓を賜ふ是天穂日命（マホヒノミコト）拾四世の孫野見ノ宿祢拾八世古人古人ハ清公の親也菅原は大和國の名所野見ノ宿祢が菅原ニ氏の大祖也

同代神亀三年七月諸國の撲御人を召して禁庭におゐて始て相撲をとらしむ此御宇より以来代々の天子相撲の節會と名附けて例年七月叡覧ある

扶桑略記ニ曰ク相撲の事桓武天皇の御代より今ニ代々の天皇いつれも皆好之ヲ負觀被渡る事なし今度まれ也すてに歳年のし毎年ゝ來 則宇多天皇の御記ニ出る

ガラス使用

雲図抄ニ曰ク相撲ハ節（セチ）供御人より相撲奉仕の人也衍諸ニハ
防人（サキモリ）之先ニ三月の比大将以下陣の座ニ於て相撲使（コトリヅカヒ）の事或
定（ジ）関白大将随身陣官賭（ノリ）弓矢数ハ有等ニ給ふ七道ニ遣
さして相撲人を召す也　相撲を召す使役より使ひとや
万葉集ニ部領使（コトリヅカヒ）と書同集ニいさゝかむかしの本の防人部領使
駿河国の防人部領使とあり或ハ相撲使とも書侍り同集ニ
大伴家持防人悲別ハ心を痛て
　麻須良男能由伎等里於比天伊田天伊気婆
　和可礼乎乎之美奈気伎家牟都麻
源氏四十六の巻椎がもとニ相撲なと公事（オホヤケゴト）しけきまぎれ侍る

寛平ハ御記ニ曰ク四年八月左勝者拾壱人右勝者二人
　七月而已ニ限らず常ニ叡覧ありける事也
承和年中大臣良房朝臣天気を伺ふ勝負の論或
定ニ依　勝負の論と大臣判断せし例也
延喜元年七月廿八日丁丑童相撲を御覧ある
延久二年ハ江記ニ曰ク相撲人二拾人次第ニ行列又右大将家来集
布子特衣犢（トク）鼻（ビ）褌（コン）也　襦を着せ徒跣（ス）足ニて練入ル
　是ハ相撲庭へ入る相撲人装束の格式也
補名院御記ニ曰ク相撲の節会供御人とは近衛府の地下人也
供御なとゝ志てむる由へなり

ガラス使用

公事根源に曰ク 相撲ハ諸國より強御人を召集て七月相撲の節といひし天子の御覧ぜらる事之先十六七日の間に召仰せありて上卿勅旨を奉て左右の近衛に相撲の使を遣はし御使は左右の近衛諸方をつけて下りて使にて相撲を召ス是を部領使と相撲使とも申也 廿六日に内取といふ事あり主上仁寿殿に出御なりて左右の相撲人犢鼻の上に狩衣襷を着して一番ツヽ出て取せらる勝負あり 廿八日召合あり天皇南殿に出御ある王卿参上して大将相撲の奏を見る 拾七番ありて勝の方乱聲あり廿九日 拔出（ヌキテ）とて相撲をすくりて御覧せらるゝ也 神亀三年にはしめて諸國より召の儀せらる

寛平七年に童相撲御覧ありし記

年中行事歌合　相撲の節会の歌

おほ見給てこそ諸ひのいそぎしは

きよ上乃ぬきてのまちわんとあり鬼

江家次第八巻に云ク 相撲召仰先二三月比大将於下陣の座に於て定之（江家次第八巻に委ク出たりこゝに略ス）同書に七月十六七日の間多クこの事あり 寛弘七年七月十三日仰にて十四日行之内取御覧 召合は節例あり 大の月廿六日小の月廿五日仁寿殿の東の庭において行之 紫宸殿節会御相撲の時相撲の長（ヲサ）三人あり今の行司也 都て相撲の諸式を司ル 故に是を昔ハ行司と云

ガラス使用

抽書　御相撲の節行司装束　緌（ヲヒカケ）摺衣（ウス）　布帯　白半臂（ビ）

下襲（カサ子）　白布袴　冬尾韜　魚袋　懸緒（左右無）　纐纈（ウツセ）（右は上の次第に出る）

相撲召合例年七月大の月廿八九日小の月廿七八日

図書

河竹の臺（ウテナ）の南に近く東西の行（ツテ）に幔を曳中央に当り幔

門を開き相撲人往来の道とす相撲人ハ皆東西に分れ長橋の

内東人端（キヘリ）に帖（タヽミ）二所を備き相撲人の座とす行司装束ハ相撲を

東西に分る事は例に拠（ヨル）其次第に云く早朝大将は南殿を出て

相撲の手番（ツガヒ）の事を定め左右相撲奏を進擬ス相撲司上下の装束

東西を奉仕ス若相撲の勝負を争ひ決せざれハ宜陽門に追下ス

次の相撲ハ借り障りを申とし相撲とも皆乱髪犢鼻褌（ドクビコン）（シタヲビ）

解れ共是ハ相撲の長（ヨサ）櫻橋に下り立て鬪之勝負を決せしむ

さる是れハ上卿仰を奉て左右の次将を召ス次将階下の

東西に進ミで各々立奉を申ス或公卿に問て其後ハ其仰を定下ス

拾七番終りて勝の方乱声ス同夜の事ハ左りハ左り同ましく右ハ右

同ましく舞樂あれを北夜りと云百人ハ左右別レ夜ル抜出ハ続キ

相撲を撰ミ出して之を召ス抽書に相撲ハ最手（ホテ）助手（スケ）を以てする

是より後ハ其上の相撲なし今の相撲とは異なり最手を

抽書中にて脇（ワキ）と云中侍る列今ハ其稱之今其上て事ハ絶たり

大内裏より相撲人を召して諸國に其所を定めて其被為あふ

防人（セキモリ）と書き其相撲ハ別の強きものなれハ人を防くに堅（カタメ）ト

ガラス使用

むかしの事は也へ今の世上なる相撲を見るに中納言の文

に乱舞をなる今名業(ナリ)[illegible]事なん亦西の方東の方と分れ

禁裏ハ格式之行司相撲ハ法式古例によりて私の事なく

あり故節会相撲の故実ハ江家次第八巻其外(ホカ)に書るゝに出侍れバ

事一繁キ也へこゝに略す

世継の翁ハ当麻[illegible]いにしへ垂仁天皇[illegible]年に相撲をとり

のひみのすくね御有侍りてかう探やぶれ侍りとや

冷泉院ハ御宇に小野宮の宮殿ハ御方々にて中務丞橘敏延と

多田満仲相撲をとりのひとりて満仲[illegible]に投けんと思ひを

打欠(カキ)のふ打損せし事とやもかゞはや押倒し無梅力を援

敏延卿実にまさりしかバ敏延亭欄の横木(ホウダテ)を取放し追身が

撲(ウタ)に気絶して踏違(コンヂガツ)て逃たりける

曽我記に云ク海老名の源[illegible]はまりけるを聞て

亦撰演ハ[illegible]には必相撲[illegible]力競へ[illegible]

流れ人を若き方にハ年(イカデ)若輩[illegible]源[illegible]膝(ヒザ)

揮(フルフ)まで出て行司をせんといひけれは老若数多[illegible]閉じける

[illegible]侍寳年[illegible]敏と[illegible]相[illegible]行るべし出て[illegible]

ありける それより相撲は此の本間の五郎[illegible]後八木(ヤギ)下[illegible]

ありしめ九[illegible]打て入[illegible]俣野の五郎亦又出て[illegible]

その名を[illegible]相撲を續て[illegible]人を投[illegible]

ガラス使用

河津三郎祐泰直垂脱捨小袖の上を手綱二筋に
重ね合はし強ク締（シメ）て出たりける俣野は東八ヶ国に名を
よばれ一ト歳も都にのぼり度々に勝たるほどの者なし
とて相撲に無雙の名をとりける俣野が手合せ反向ツ振るや
當ニ横さまにや繋ヶ倒スべきと思ふ所を河津俣野が上帯
むずと掴（ツカ）ンで首へ馬手へまはし閾より高ク差揚られハ
俣野足をさしのべ河津が股に繋（カラミ）けるを河津すかさず
ゐてかへし逆ニして高々とさし揚所を放チ真中に
進て横振に投たりける
源平盛衰記に云ク（岸坂合戦）于時武蔵國の住人續（ツヾキ）黨の大将

太郎又郎とて比ふ者なき大力なりけるが太郎ハ東國無
雙の相撲の上手にて年十八にて聞えける是も又和田小次郎義茂（モチ）と
續（ツヾキ）太郎推並て組（ツ）ンで馬より下へ落續ハ大力なれハ落ながら
中々思ふ立ッ小次郎と度の纏（マトヘ）るごとくしたゝせて押立直を續太郎
ハ大カラなる上長ク高キ男にて和田小次郎が長（タケ）小キが之に係（カヽツ）て押付
て打ンとせられける和田兎角細クちゞまりけれハ手を潜（クヾツ）て續を打倒し
討ンと思へ共長の大小はなければちゞに何ともなし相撲は
若く上手や續ハ和田が甲（ヨロヒ）の上帯引よせて内繋（カラミ）に掛落て冑（カブト）
の總（シコロ）を傾て十けぬ度（ビ）起きもならざりける和田續に冑を折せて
其後勝負はわかりけれハ稼を身（イ）て起きまかりける續内繋在る

たばしり大堀に堀（ワクミ）こしを掛られたる小次郎御乗たる大庭毛を乗卒し
外（ソト）概に掛って骨は折りぬ身無事と思ひけるは和田が鐙が上帯を取って
引寄自撃にかけて結て冑は鐙地と身て渚へ向って鋭（エイ）聲
出して走りける鐙骨折（リ）ぬ強掛て走ぬれは岩のあたりに
走ぬ掛らまかりに倒し走り追へさんとぬ追へ来たるは志まり弓手の
腕を踏み冑の上へんにまちさんと入りし乱髪取って師ヶ首を何にし
搔落し首をは岩の上に置（キ）鐙に身に飛お掛って沖よる寄せ来る
浪に足を洗し息（キ）を休め居たり又敵寄て落延しと
おもひ走れは鐙の首を高くかかけ根と結て馬に乗り寄りたる杖実
敵落へとて呼りける鐙の又郎が打れて打出して嵬（カリ）小三郎
云ひけるは和君は鐙が弟也又郎也や此が兄が敵とて義秀と組（ドモ）と
思ひて掛る汝が兄の太郎は東國第一の力人也丈夫に組（たぐ）
しまりて損ぜられまたれは今かちのおとし疲（トクレ）たまりて義秀が首取
取しとぞ云ける又郎海の如くなる兄猶の弟なれば実もおぼし押し
並べひたまと組（ミ）て馬より下へ落るか何には走りける又郎が下になり
先なる頭（クビ）をぞ捕ると見角て岩の尾に掛浪にぞ見るなり世の体斬
に鐙小太郎父と伯父とを討まして三浦年（カ）がまって大の中走れ
反して番と思ひ爾て兵とも各川甲（ヨロヒ）は胸板に中（アタリ）て躍り返る
小次郎が射向の袖振合せ鐙を頭ヶ苦し氣為陰音して
云ひけるは漸（ヤ）く小太郎よ親の敵とはよく捕ふてたすけし親の敵

ガラス使用

あり地の手に掛合へ寄せ近よらぬハ恐ろしき者和君ら弓射
さして志るし遠矢にて義秀が甲をはしと通さじ義秀
鳥眼日より鈍からず兵粮を遣さずして大事ハ敵ハ数多合とぬ
まてに労し将に餘ごし兄ゆまぶ力なし父が敵なれハさらぞ海まで
他の者を参んよりあゆつて首と而と延べて斬ラせん爲る謂れハ小太郎
撫と返いて馬より飛下り太刀抜て掛り小次郎が冑ハ鉢を
ちよッとつらせて片と手端り捕りて引よせいざ組て丸入てを入レ
透るなし首掻切ニッハ首を二ツとは反陣々に弁々一ツある太刀ハ
先ニ貫きあると弄り指擧兜名乗りを只今自山が陣のまさく
敵二騎付捕って浮別のきらば誰と見思ふ音あれ聞キ眼メあれ

日本ニ桓武天皇ハ苗裔高望王（タカモチノオホキミ）より拾壱代三浦の大助義明が
孫和田小次郎義秀生年拾七歳ニ罷と思ふ人ハ大将ニ郎等
をよつて組と我と晴り竜
東鑑四巻ニ云 建長六年甲寅閏五月一日壬寅相州自ラ
下若輩をもよふし御所にまいり将軍家廣ハ御所に
出御 御酒宴及数杯ニ於よび近習の人々を召され若輩ニ
稽古時相州申されて云 近年武藝廃（スタレ）て自他門大ニ恥御
也藝の事をと好まてニ和歌の乱を忘へ読ぬ此意を謂ッ廢し態を
ば弓馬の藝ハ進テ箴を令興し先局社ニおゐて相撲ハ騎
負決せ壁虫威べきや否や御沙汰のよしと云将軍家

時に御入興ありて實盛ハ逐電し盛ハ固辞せしむ陸奥ハ掃部助奉行として遁避（トンヒ）の事にあたて公承ハ右往する由を申段の旨再三仰合に依テ捨四輩憖（ナマジイ）に手合におよし衣裳を撤せ段長田兵衛太郎右盛され御に候き勝負の是非を判（ワケ）申す播代此相撲を好むに依テ也

相撲

一番　左持　三浦遠江六郎左衛門尉
　　　右　　結城上野十郎

二番　　　　大須賀太郎四郎
　　　　　　波多野小次郎

四番　左勝　橘薩摩余一
　　　右　　服部保茂次

五番　左勝　廣沢余三
　　　右　　加茂三郎

三番　左持　渋谷太郎左衛門尉
　　　右　　揖枚中務三郎

六番　左持　常陸次郎左衛
　　　右　　土肥四郎

勝負持とも皆御前に召出され御劔御衣御馬を雲客分之ッ負人とものハ堪居に論せ段大器を以各酒を給ハる事二度御一門の諸大夫等扶に候之元興ある盛ありし時の壮観也

東鑑四十七巻に云ク康元二年丁巳十月十六日丙申朝雨降夕甚雨雷鳴ス申の刻北殿今日為の儀を以御所に南殿に相撲を覧（ミ）給ふ相ハ宗の武者等負人の子に候せ強弱兄弟の事猶（ト）のごとし時の壮観也

相撲

一番 左 伊藤三郎
右 中次
二番 左 伊藤与郎
右 小野四郎
三番 左 荒作三郎
右 平次郎
四番 左 平三郎
右 安廣三郎
五番 左 萩薗孫太郎
右 四郎太郎

太平記に云妻鹿孫三郎長宗ハ薩摩の氏長が末にして
ちから人にすぐれ器量人に踰（コエ）たり生年十六の春比より
好こで相撲をとりけるに日本六十余州の中に片手にも掛ル
ものなし 同書に新田義貞公此四天王のうち畑六郎左衛門
時能ハ武蔵の国の住人也云路の法力にて桃のちから篇たり
しく彼の甚国ありこれハ彼薩摩の氏長をかくやとおほしく
おひそだし歳十六の時より相撲を好て取けるに坂東
八箇国にあへて更に勝者のなかりしと見
山中鹿之助幸盛ハ尼子義久の十勇士の随一也拾三四歳の
ころより相撲を好で取けるに国中に於て彼に勝者なし
身長七尺六寸力の強き事たとへがたし廿六歳までに及十六度
勝をとりて世をうりしと謂ヒ傳フ
元亀元年二月廿五日織田信長公近江に常楽寺に於
駐ひ翌三日より国中の相撲を集めて御覧ける処すぐれたる

ガラス使用

その日は百濟寺の鹿同小鹿宮居眼左衛門鯰江又市郎青地
与右衛門等なり鯰江青地両人は召出され熨斗付の刀脇差を給はりて
召仕へしたて具せられけりすべて信長公御相撲の事委
織田軍記に出たりここに男は木瀬太郎太夫同春蔵庵
勝負の判役勤めけり

扨又今度の頃を蒲生飛驒守氏郷が家人に西村左馬之助
といふ大男は強力相撲の上手にてありける子細あつて勘当せられけるが
免(ユル)されて帰参致して氏郷自身が力にては勝りけるを知りながら
彼が不敵を試(タメシ)みんとや思はれけん帰参は翌日左馬之助を
召て飯後に相撲を取り膂力を試みんとて座にまかりけるに

左馬之助思ふ様は勝たんもいかがならんや背かん負けんに
おゐては猶帰参も成るまじや思ひ返せば心底猶豫いたしけるが
武士はおもひかへすまじきが恥かしき事なりと打ち定めて勝を渡し
て後今氏郷に勝ちけり氏郷も無念なり今一番取とて立ちむかひしを端
近くより遊ぶ事となれば此度は左馬之助負けて織田様に荒せよ
うしと手に汗を握りけるが西村すこし思案して此度業(ワザ)と
負けて流るるものと思ひきわんよりは有耶(イ)に備へ氏郷奴と決定し
今度は西村勝ちけり氏郷喜(エミ)を含み汝がちからによりて勝ちけり
勝負は情のものならん武備の道ありとて帰参を加増を
下給ひき此時負けもしたりせば永く無きならんや

ガラス使用

中夏角觝の事（角觝ハ偽者のすまふ也）

漢武故事ニ曰ク角觝ハむかし六國の時紀遊ぶ所也とあり漢書ニ云戦國の時稍く武を講(ナラハシ)めて戯楽になして相誇(ホコリ)その材力をあらそひしむ以テ相觝(ツキ)そこなハすと云史記ニ秦の二世甘泉宮にありて角觝をなして楽トあり事物紀原九巻圓機活法律学十三巻等ニ見えたり漢の武帝ニも角觝ハ武備の一助となし弓矢剣戟或ハ甲冑等具の業なれハ変物の業(ワザ)とし故組打手合のなれバ組合の眞理を辨へ強弱虚実の手合武事にあつて法術を忘(ワス)るべからざる所也

天竺相撲始

本行経に曰ク悉多太子諸の釋種と共ニ相撲ス難陀相撲スノ體を偽(ヤブ)り終ニ一切の釋種一時ニ来て太子を撲(ウツ)太子手をもつ(テ)破(レ)に觸ル皆悉ク地ニ倒ル于時彼釋及諸看者皆奇特の心を生ズと云義楚本起経を引て云ク南後漢名法蒐(苑)珠林（十ノ七十六ノ巻ニ出ル云量　本経の抄資一ノ巻ニ出ル）太子十七（悉多太子也　白浄王の子）昼夜憂念していかにとして歓娯せず常ニ出家を念ズ父王僕ニ問フ太子何ぞ日々ニ憂怖し給や于時一臣言ク太子長じて年長(ズ)宜(ク)當(マサ)ニ妻娶すべし其の心を廻(ス)べし依テ名女を擇(エラ)ぶに國の王者覚女(ヒメ)あり名て瞿(グ)夷(イ)と謂（未曾有經法苑珠林　には瞿夷といへる也列）耶(ヤ)輸(シュ)陀(タ)羅(ラ)女(ニョ)也天下無雙也八國の諸王子の太子求(ム)之(ヲ)

ガラス使用

白浄王聞已て則悉達が所に至て瞿夷をもて悉達に与へんと云フ此女
母及諸群臣を集めて懐を告して宜ク悉達に帰ぐべしと聰て
飲食せしむ于時女父に問何が故へ楽遊ざる父則答て云ク諸王女を
をもて聘これを許ざる又白浄王今女を娶んと欲す若し嚮ずんバ
王則家を罪せん事女を与ずバ諸王怨を結ぶ女云ク憂ること
なかれ和却して七日有て城門に於て諸王として勝負せしめ我技法
此者を聞さしむれバ城に来べし于時父白浄王に語ル王聞て甚憂念し
曰ク太子未練也何ぞ勝事を得ん于時女至て門に術士雲集ス悉多
太子ノ郎憂陀難陀調達等の五百人も共に来耐藝の具を出しけり
城門に至る于時先ツ調達門に塞る象を投撲象忽死ス
難陀これをとりて道の側に置し次に太子象を擲城外に出して
象蘇を故のごとし其後調達と諸の力士と相撲して調達に
対する者なし難陀と調達勝負を決ス達多地に躃心神悶絶ス
白浄王難陀に告て汝悉陀と共に勝負を決せよ難陀答テ
白ク兄ハ須弥のごとし自らハ芥子のごとし何ぞ勝負をせんとて
降伏して退ぬと云々百縁経にハ佛無量の力を現し給ふ
法華経第十四安楽行品に曰相扠相撲及那羅等種々変現
之戯と云文句の八巻法花科註に云ク相扠とハ拳を以て人
に加ふるの也相撲ハ左手にかけてふ事と出たり
涅槃経にハ五百の力士と力を争ひ大磐石を擲て空中に飛ス

亦角力相撲とも作なり

日本書紀垂仁天皇の紀に捔力と書て相撲と同訓也

亦角力をすまふとも訓す角力拗取て挑組を考ふにへ是也(ゴウダ)

又此(テ)の龍あり元禄書中夏天竺にも有之由故実人の傳しなり

文面際限なき事なれハ畧(ヲ)之畢

相撲教へ方の事

一 鎧場ハ甲冑の上也具足ハ鐡を練(キタヘ)切実の業自在なる透

あらざれハ切実の実(タヤス)用からず平時に従(ス)膚(ハダ)

にて切実の術を練し甲冑具足を得て中(アタラ)ざる事

多かるべし甲冑の理会ハ武術の指要也されバ甲冑の上

にて切実の自在なれハ十段(ビ)の鎧組ハ六段七段ハ組手

にあらず必組也古鎧の相撲にあり多くハ組手へと業段除

を離れ唯に敵心體の浮虚なる所一向(ヒタスラ)生死の危畏あり故武

の要用なる所ハ組手也是一大事なり組手に就ていハゞある

業をも勝理を得ず稽古の武士相撲を成す事にあらねバされ

相撲は業ハ只敵心體の強弱虚実をも教へ手教の理会鎧

場組手の用にあらざれハあらず無し去れども能々練する

時ハ心體更に無二の業をも得て順逆の理を見し極

徐み先文に慕ざるのミ是心活生なして深まる事く

にして届せざる事組手にて能く心にて至る所の理自ら(ナヅ)なる

右両段一人の微ニ思慮なくざれバ元體より圓々に至る勇氣無きにく

充(ミツ)る者ハ強を廢して徒ク元よりも妙術を得る事能ハずして百

年有余の手数悪く此股心體此業なれバ彼ハ叶ハずといふ事なし

彼レハ從(ス)膚(ハダ)に叶ひ是ハ甲冑に叶ハざるといふハ未練のいふ事なり

心體熟するとは人體其事の用を失ハざる時ハ捨ルと云ハ世俗

いふ所也

一 慶長年中に行司岩井播磨が謂けるハ近年相撲に古儀と

いふものを用ひ我が勝を定め指を突クを負へとは如何の事とも此

事新法也而偏古儀にて勝負を限る事古信舊記にも見へず

勧せる者等の一方不審(イブカシ)きるや古法ハ人敵屋(ヒトカクヤ)とて相撲

取れる者ハ場所の間を離し圓取に人無く座ニ推ニ述し

起揚らざるを負とし膝を衝(ツキ)手をつき此座腰抔と落てる

結を能く持数を働せざるを助とし扨古来此相撲八十手数(カズ)の業

にて持勝を衝きたるの勝に成る例多ニ年竟相撲

は組手は一勝なり然又相撲の勝負結にては組み取らすして

をは称しして持ツ者其奥の業手あふれとて云り其節木の瀬

太郎太夫が門弟の明石道寿とて古来の相撲にも行司と

兼る者の頃より答て云り凡勝負の理何れの数とも先勝を表

とし上より先の持多也始終纏(マトヒ)て離(ハナ)る時蓋ニ先ニ負て後

に持といふ事にハ勝負ハ九死一生の持ハ捨(ヒロ)ひ勝といふものなり

相撲の勝負に於ても甲冑の理合あるハ組みられ折返し

を掛違ひして持事ハ某後の足踏にて詮いふ事新人平時相撲組

合のときの先備成ハ後の先ならず皆三段遣ひ法儀を用ゆる事備へを

限りて一騎ニ心得るハ弁へ事之去儀ハ二間より一人越ハ成人越ハ三人ニ至る程を

いふものゝ挟逈は内ニして敵と中合（アタリ）張弱虚實の理合を能得てハ

勝負道理を大意の教ゆるもの也彼ノ二間より一人の内ニ敵を

強て踏止るは贅ニなし進ミ行き出会ふ者あらは弱（ヨハミ）必死の

我備へあらは是を世（せ）事や後へ寄り可笑事益なし後ニ眼目

なし地ニ続き水溝の合異にて後へ寄り組の弱ミ知りて

押さるゝ敵の法ハ之を一へ加へて然し敵の来り掛る急キ時ハ留め方の事也

あり將又膝を衝手をつき勝の前まて體理の強ミにかゝはる者

倒れ身ニして必死の負を得る一端也　相撲ハ組打平時の手縁

なれバ出来ぬといへとも金神出張なる事成敷も組層のものなる事

敵と鎌（カマ）ざれハ勝負の理なし去ではそれ組合せ先に彼是達

間なし二足より一人の圓殺ニなるんせまれ理と世ば更體理ニ而

拾ゐて仕掛じかりてハ軽き負ニても勝紀しかる記すものにや

一　相撲の勝負ハ強といふものにて足多ミことに細ハ去儀隙へ付掛け押を

専らとして敵の足捷く深き掛を備として手を衝（ツキ）膝を衝こと

強（キ）備ともの跡路勝負ニ退（ノ）く者古来ハ勝負ニ強しとて嫌へり

されハ解怠の意（イ）あるもの也且（ツ）勝負ニ強く敵深き所

あしかる弱(ヨハシ)ければ由ありとも向ふ強敵をも強弱に應ず授受
衛する實勝を押強(ヒタスラ)を手道へされぬ程に強きを勝負強けれはこそ
強ければ其を敵の働きの程に強を待是は古法は相撲に勝負へに
強けれは共に引べからずして當りするものや

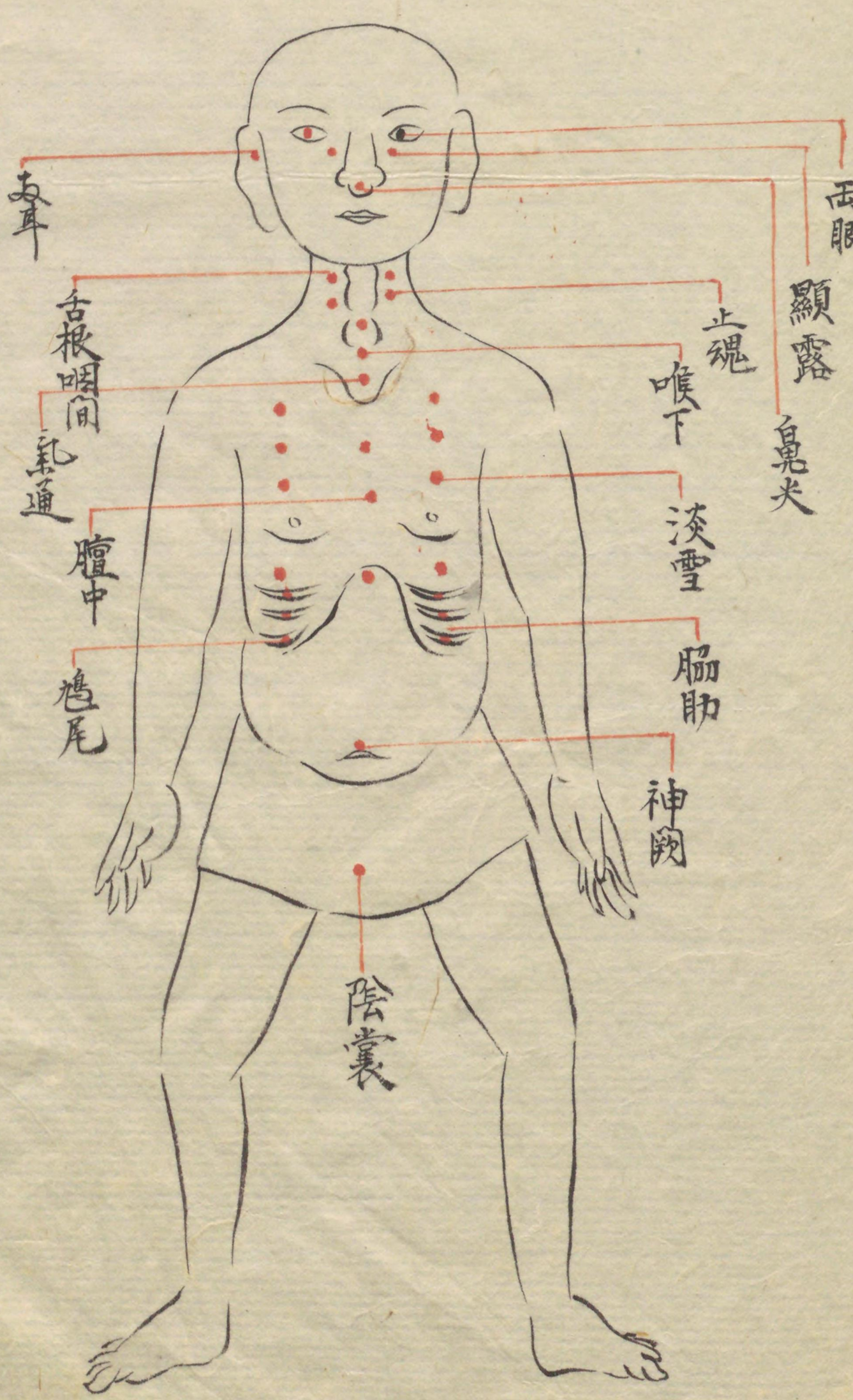
一 手合(テアヒ)といふは相撲初發聲此發聲(シ)り合事之足行強氣出法
此強を設り手合(テアヒ)に聲を發する時は力は聲に連(レ)して出る理之
手を揚四肢心體に法を發(シ)勇機合所に充(ル)時心體一同
にして業滞る事なし然は戰場敵に合(アフ)て聲を
勇氣を發するがごとし聲なきときは勇氣の起るまじきより
なし相撲相撲とはべき已不可なくて有業は(モミ)撲筋力をた

まけなく有業此外に金剛所に力足を踏む事逆上の氣を
下に止(ト)めて有足に筋力を顕(ス)是發強の勢(ヒ)古撲古法の教へ
なり然るに近年手合なく聲もなく掛合いても力足も化粧に
縮て古法をもどく是等は勇氣を發する事を辨へ(ツ)ず全(ク)
角力の勢(ヒ)に所は唯其手に入りて得すして自己とも心として
行を為し得へ(キ)を探究事此きづまで持る時體理の業扱
する事ある時は勝ても徹を術理をおしは負へき者也
なり強行始あり古法の格式に初りを紀するの也手合(ヒ)よ
りなし先て先後此理は彼我の虚實に初り先勝を
始めの立合はある後は先として敵の来り様あしき節は

後の先ニて破る事多し故上手ハ始終先を遂（ツ）て猶中手ハ
始終先ニ進ミ後ハ先後進退動静共業を熟し敵ニ
色ガ脈をみせざれハ敵の入難き所なし呼吸乱ざれバ氣逆上（サカ）
らバ心體ニ勇氣の收出卿叙吉法の教ニ而常住坐臥心ぬ
徹（コ）忘れざる時ハおのづから業熟し備りハ己ニ於て他（ヒト）ニ於ても
手組ニ反（ソリ）の手返投（ヨヒナゲ）の類敵ニ仰（アフノキ）て重（リ）ハ仰て業ニ
疎るべし志強盛なる者より上なるの業の基
肥その大業を業の自在ニ自在ト謂へし

手合（ヒ）の事

禁穴的中図


両眼
顯露
鼻尖
上魂
喉下
淡雪
脇肋
神闕
陰嚢
両耳
舌根
咽間
亂通
膻中
鳩尾

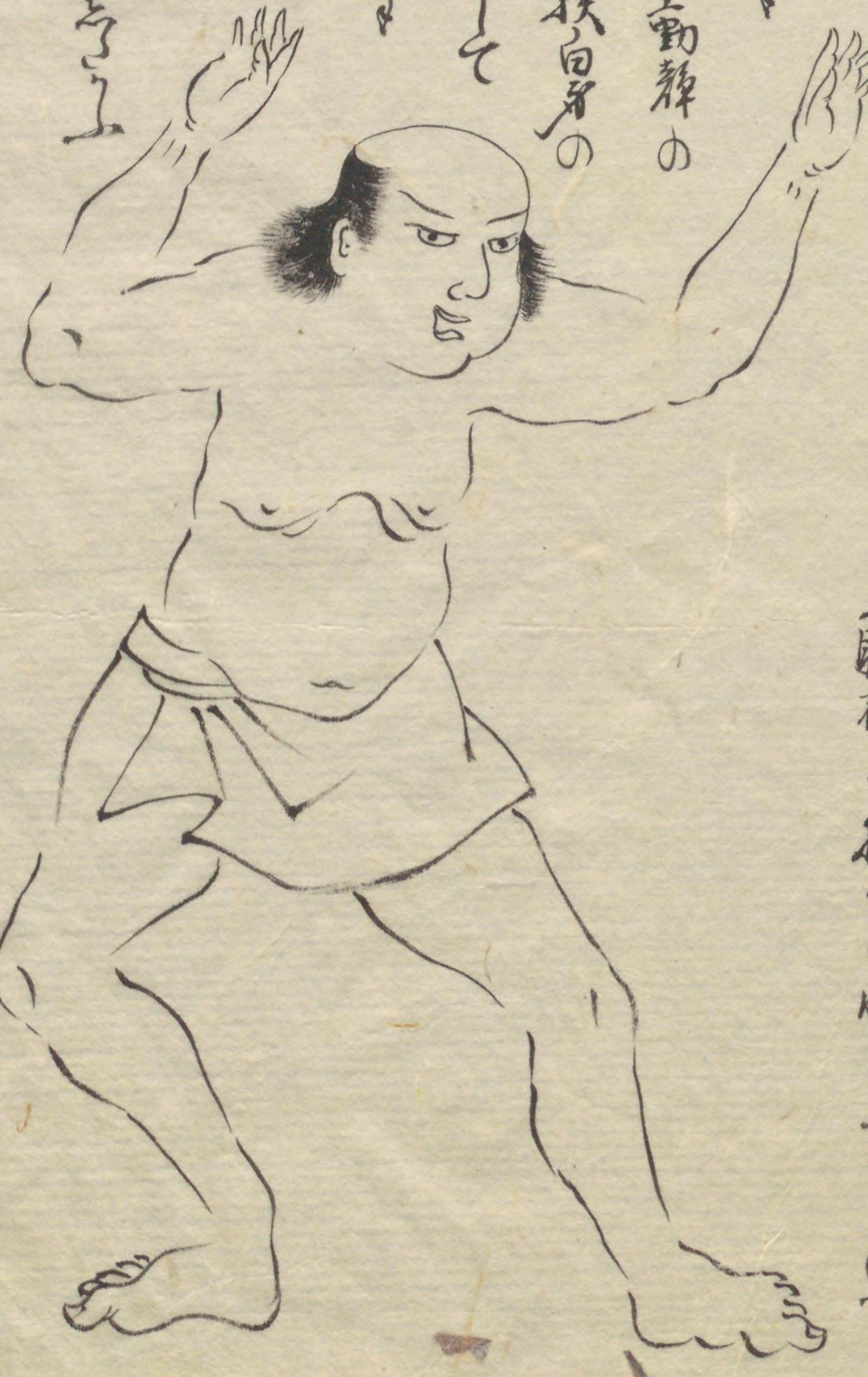
朱星の點各真九中（アタリ）

○哭手戟ハ大指にて眼を突事 ○毒掌にて一掴にして毒耳を張り川を打
氣を絶し死に至る ○顕露拳にて突事 鼻息常に上を撲とる
又眼くらむものを絶入せん鼻柱を下より上へ突き込むを打ハ悶絶死に至る ○舌
根咽喉の間大指食指にてしむる事 ○咽喉喉下を拳にて突事 ○止魂拳
にて突事 ○氣通大指を突込む事 ○腋之拳にて突事 ○膻中拳を
以て突く事 ○眼昏拳にて突事 ○燕尾拳にて突事 ○神闕拳にて突
○陰嚢ハ大指食指の前より出して陰玉を掌中に握り又指一同にしむる
右ハ外口傳の中あり凡無手のあり所息を結其氣を發揮して其の急所
せさる事多く真剣のあらりの外なる手のへ ○立業ゟありて行ひ又ハ陰嚢をしむる
出へふいまむ ○胸膜を蹴る事真剣之 ○指出くみを取りて折り返す事 二指
揆に折る事関節

相撲は業ハ平時の手練と云へとも中合に勝つべけれども是ハ肢體を破傷し或ハ
殺めさしして撲究にありて悶絶いたさする間もあり故相撲手組の始め
に撲究的中の上を出し これをいましむ此上ハ業級の所にして平時
相撲手練の用道に於て平時にも殺活の手練に行力本力を用ひにひとし
甲冑の上にて中に所なし只表裏さらにして相撲の理合一つなるへし
極文相撲ハ白身の業なれハ真剣の中を見る考へきそとめ皆其の外

上段の手合

上段の手合ハ互ニ手指を上にかざりされと
互眼相を勝負の情をあらはさぬもの也

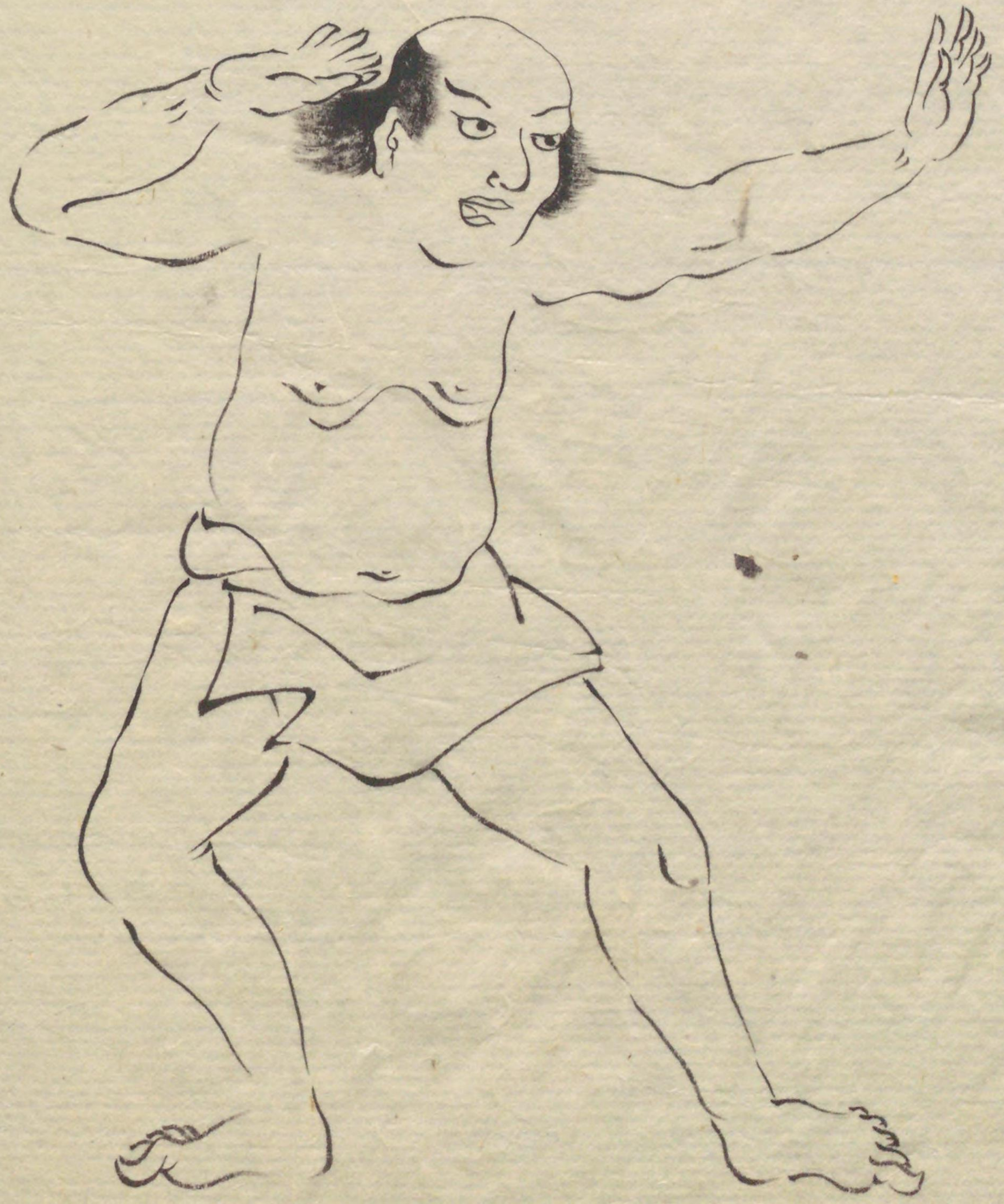


甲冑の理合とは
無心體の進退動静の
所ニ至らずニ相撲白身の
業甲冑を忘して
不自由といふなり
あたは心體
業に熟する
ときは業これニ至らず

ガラス使用

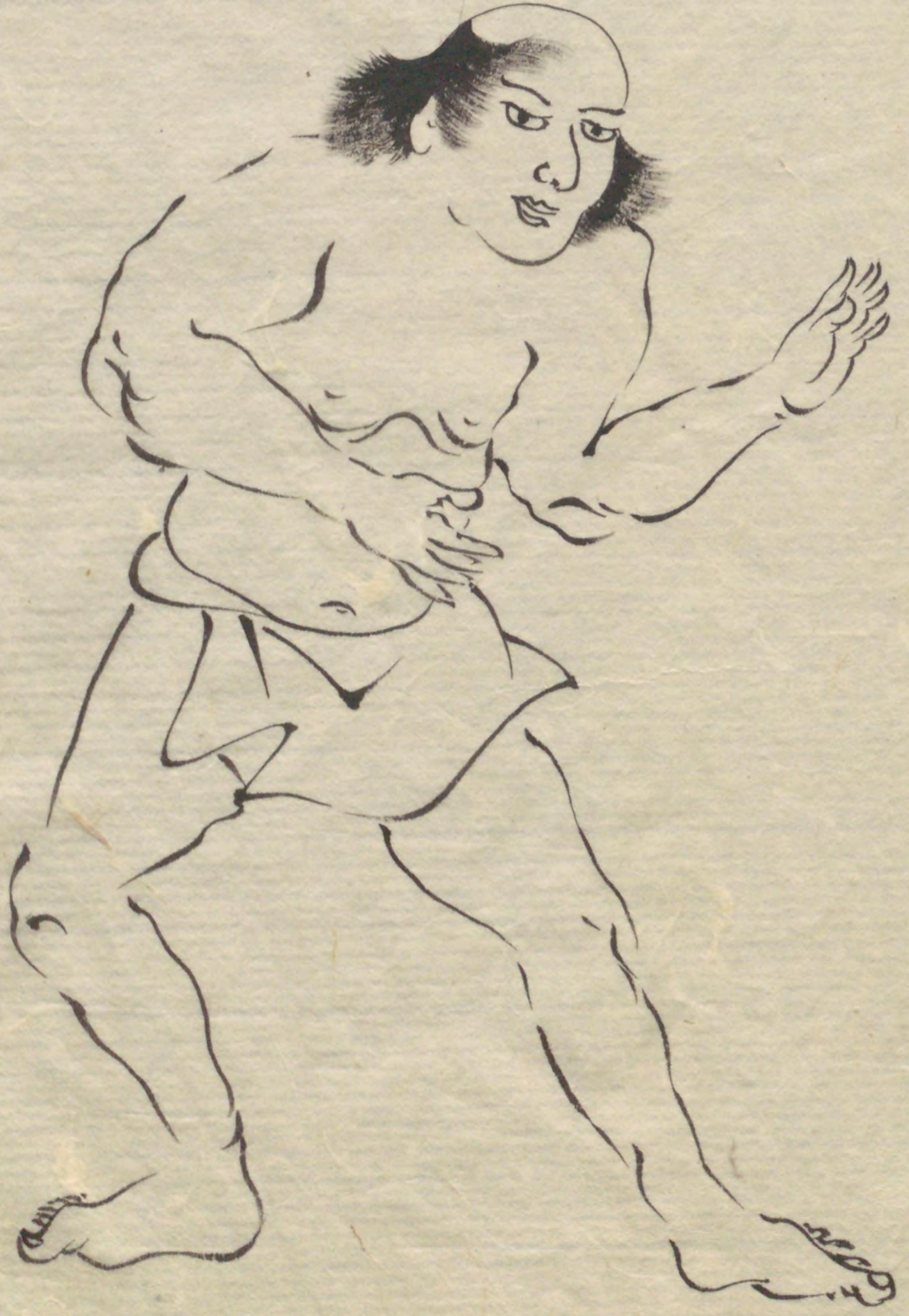
中段の手合ヒ

中段ハ敵手指敵眼ノ通リニ揚ル



下段の手合

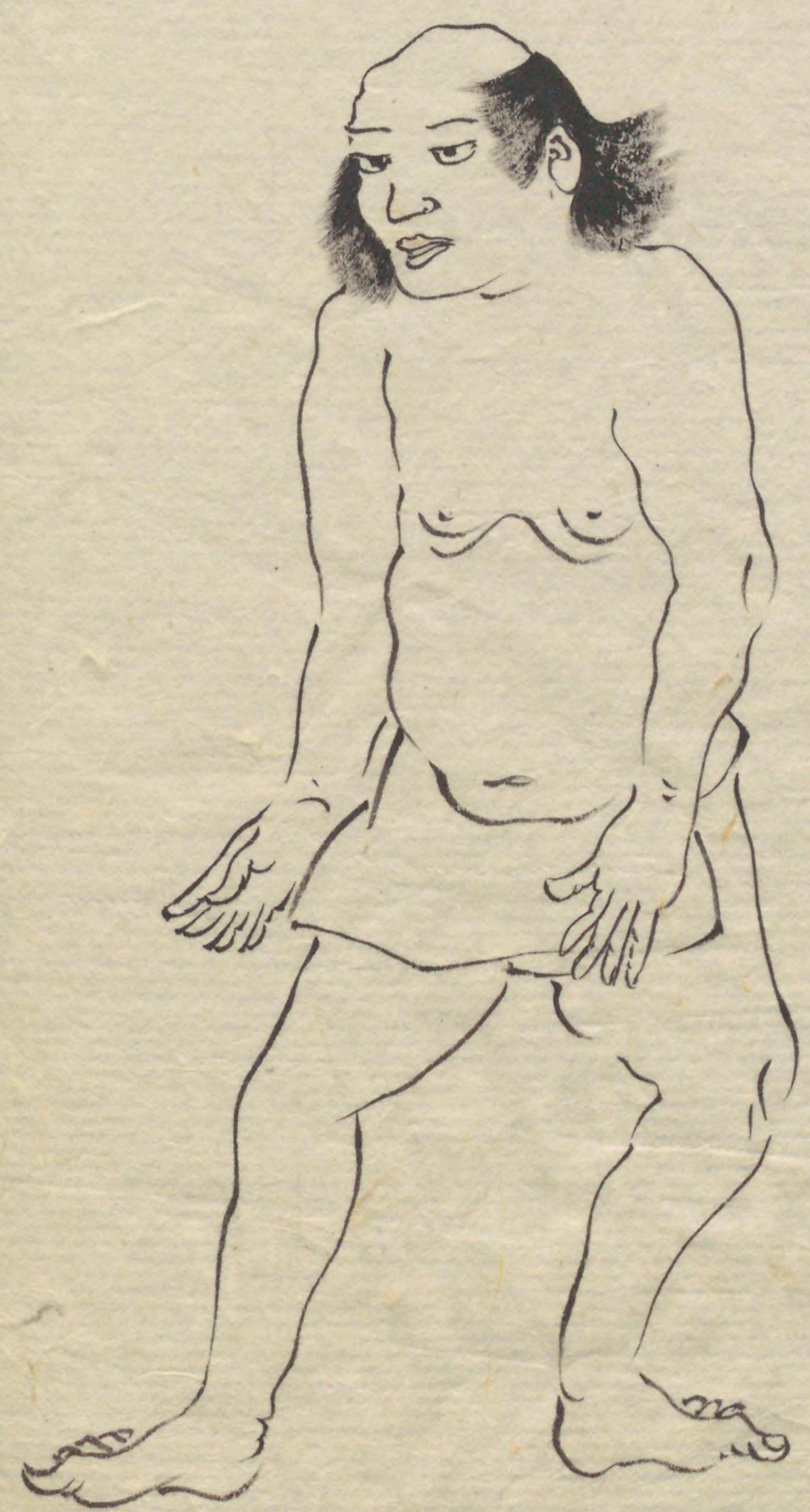
下段ハ敵手肩下ニ付リ



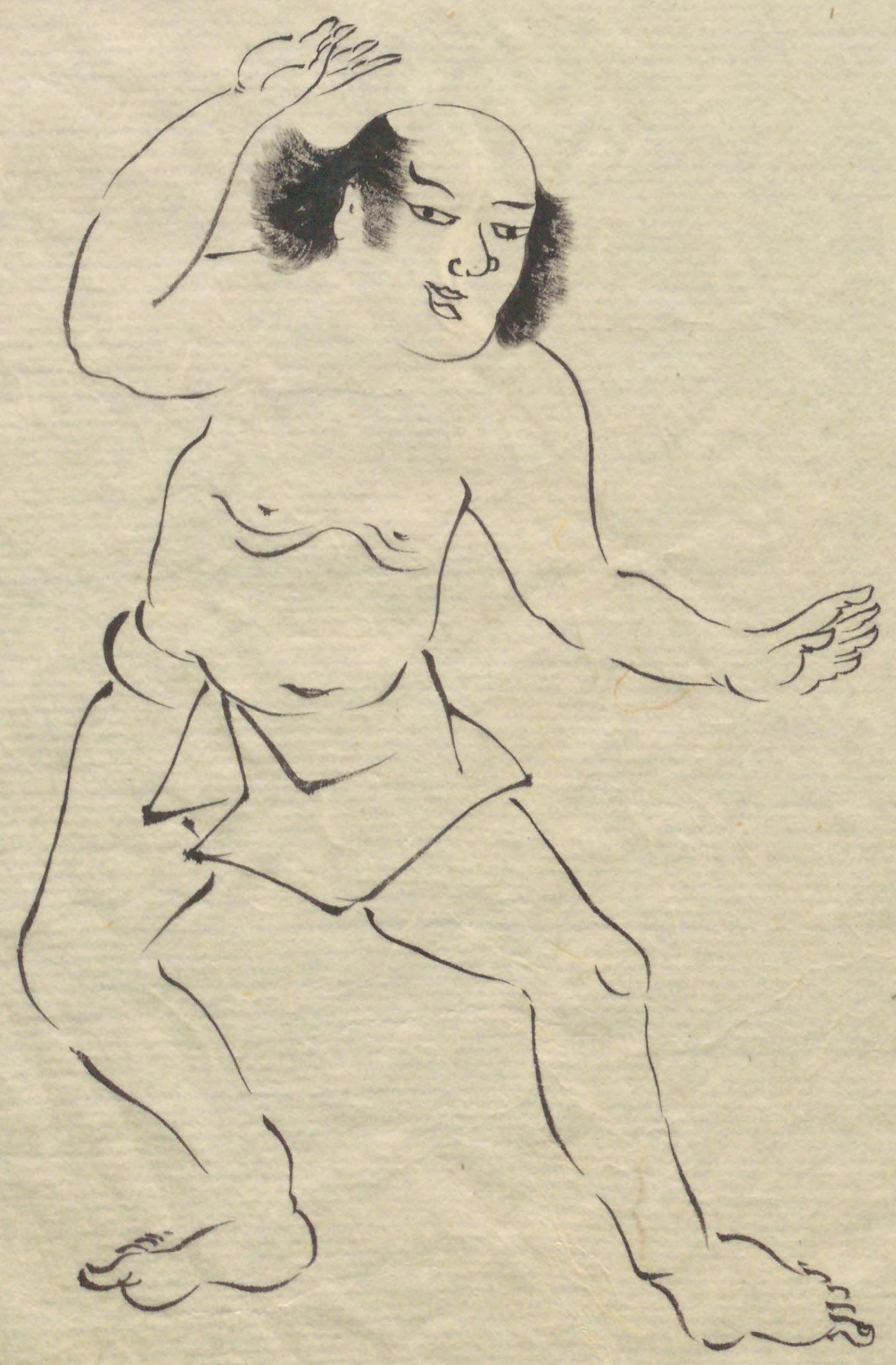
ガラス使用

奇相此手合或ハ一般の手合

奇ハ変動して常なく敵の強弱虚実ニよりて轉圜發機の象あり一般にかうちを見せ是則宗家事正のハ彼ニ心べき事といふ意也



陰陽此手合　奇手ニ倚手持故名とす

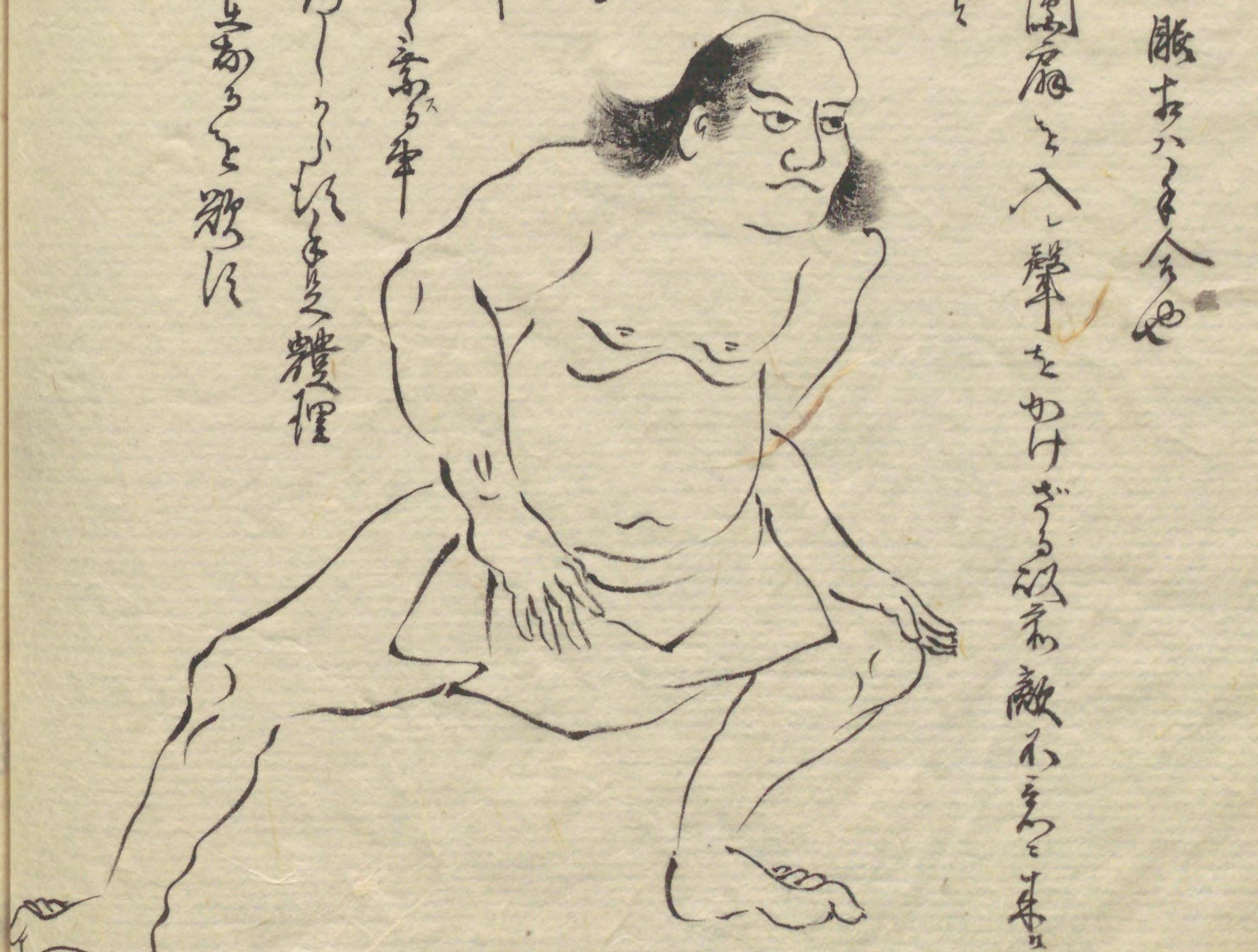


ガラス使用

居腰相

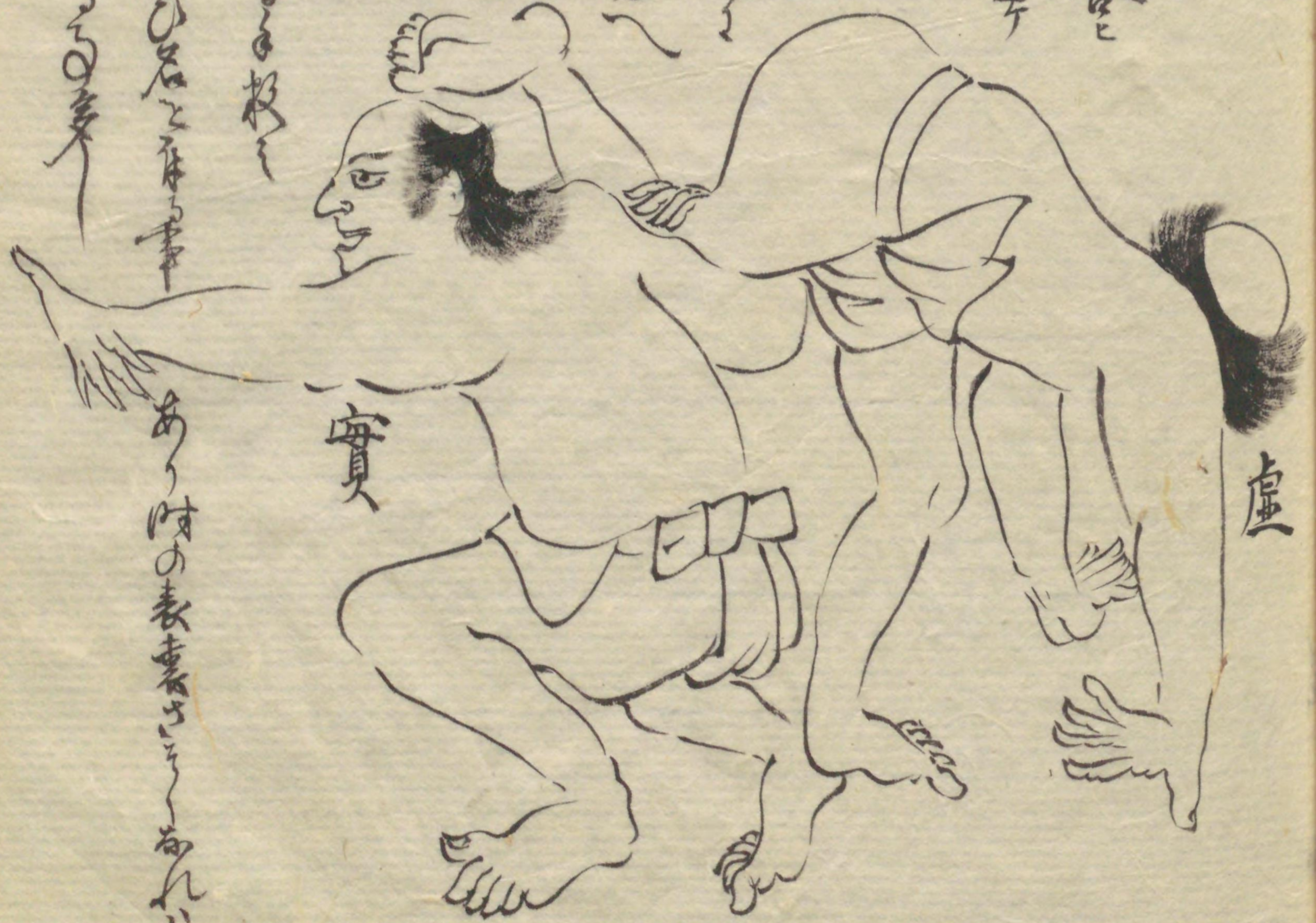
之腰ハ手合也

相撲雙方居合行司團扇を入れ拳をかけざる以前敵不意を来るを
防ぐ秘（チ）也臨へ衝（ツキ）迯へされども
右根へさし迚まで腰常を
されども敵の腰相體理を
うるびにの来る危き所を
おぼゆる勝負の情を知る
このも也腰機変あらしく
進退を容に手を膝にかうて腰ゆる事
膝を発し起き出る〇より結して踏ほ足體理
そろふに進退動静出入自在なるを欲す



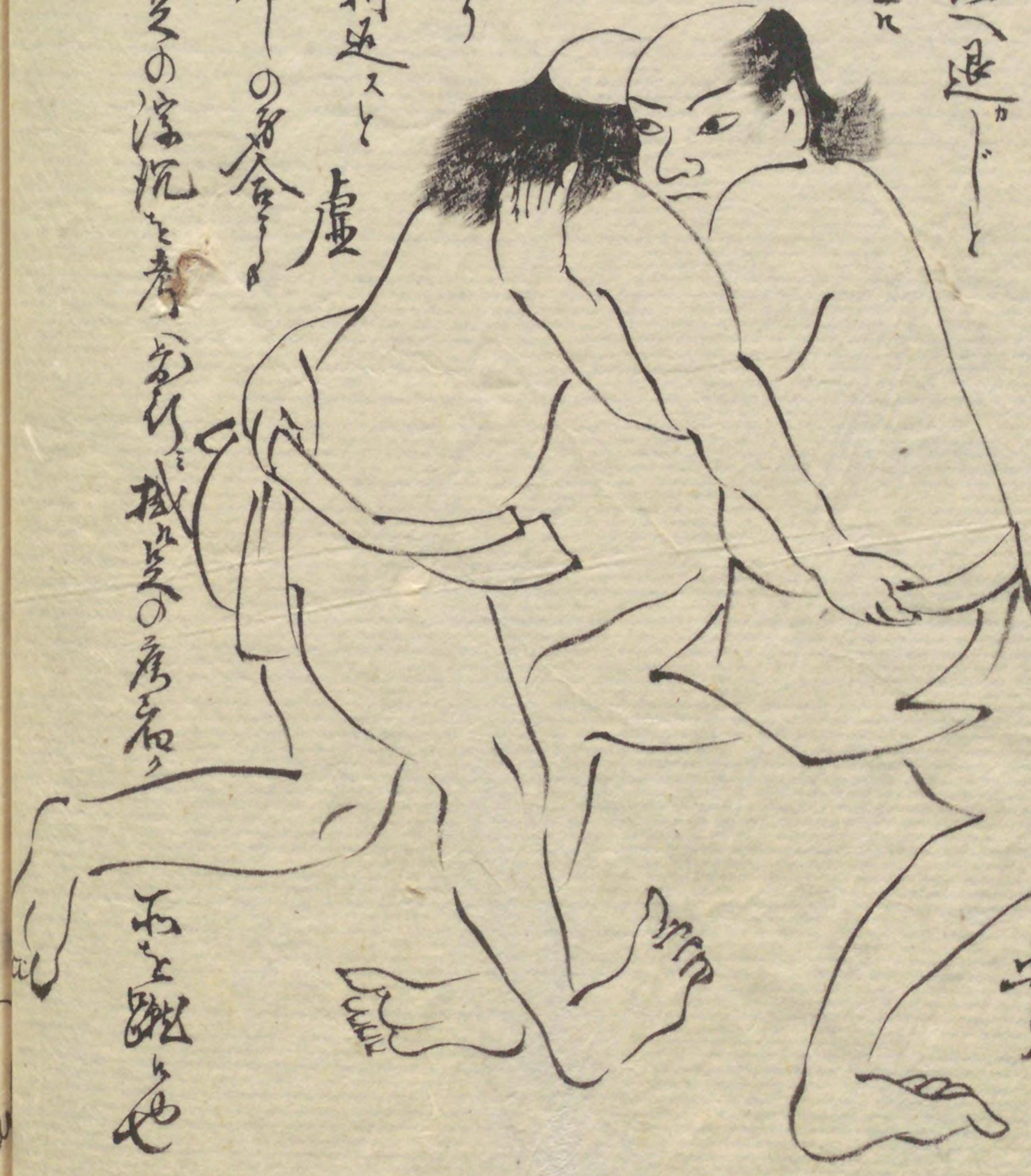
立居腰

雙方立チ合ふ始り互ひにまだ手合と
つき合と虚の方相撲をする仕合ひ
互ひにもふ當る時實の方下より
居腰にて始り虚の方の右の根へ
披かれ右の足をとりて倒之勝あり
然るに虚上を踊り上る手強あるゆへ
逆がへしにかける元相撲の手段
態あらんとも此くと居がんより
發して四肢の體の業とする所
互ひに頼みもし古来より今にせざるの手段を
いづれも考へ進退體理の法踊ふ及び居を取る事
一身の相撲に不手心得にもいづるの事
あり時の表裏さとしあれハ



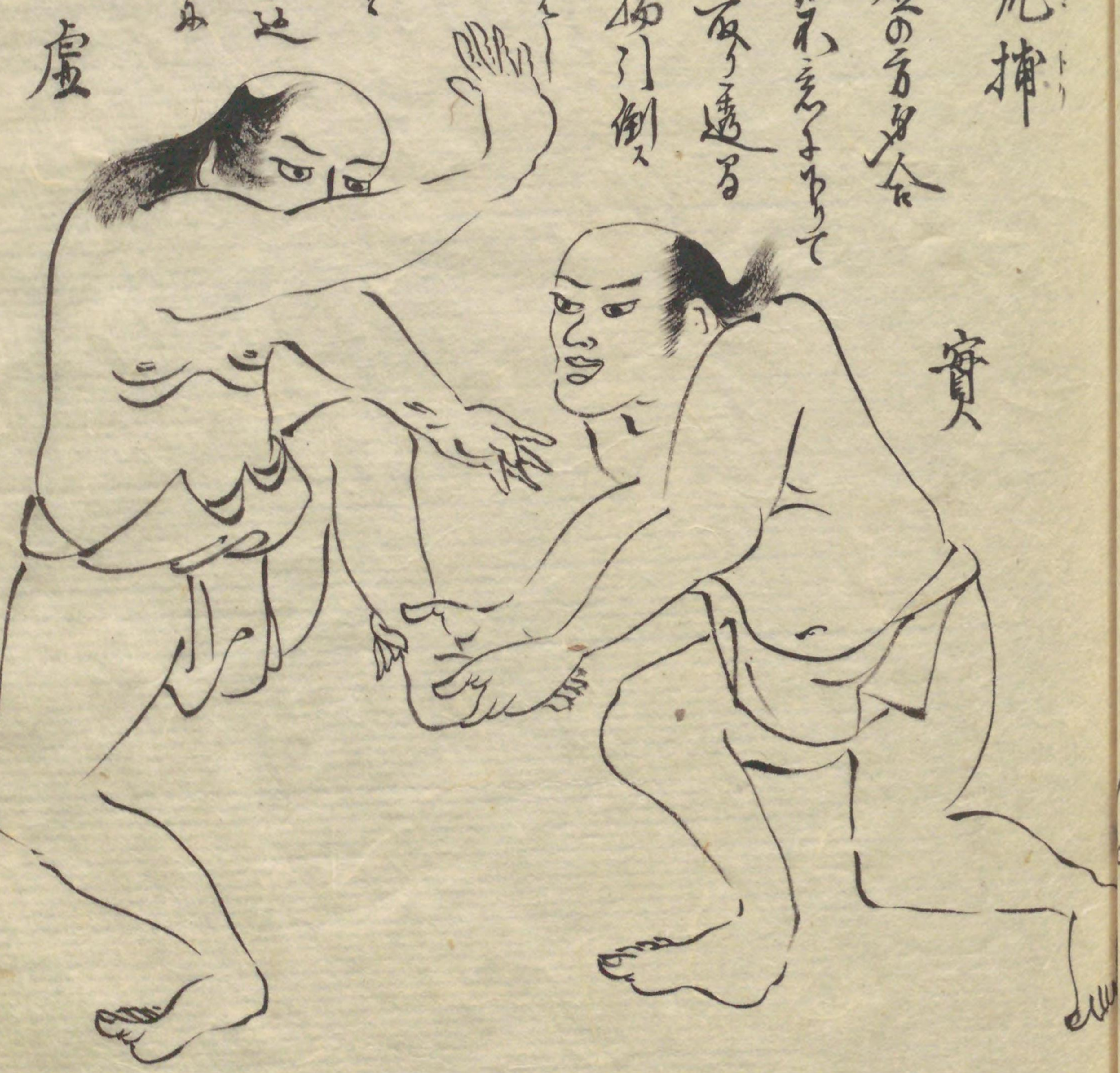
蹴返シ

双方四ッ手さし合實人の方虚の方を胸にて推シ起ス虚押し起されてハ踏こみ如く出へ押起されじと力を入レて留る折を実出張ぬれハ虚ハ寸ゝ後へ退カじと左手ニ出張て搦之を出張ぬれ足の膝裏に右と蹴掛蹴ありし実の方虚を高手にて己が右の方へ押し返ス拍己の方を胸に當て右を蹴と胸を捻ると折返スと三拍子一同ニ向ふ繰つゞき寄しの呼合にて後ゟ無右蹴返ス也此ハ欲の足の浮沈を考へ出ぬき擬足の膝右ゟ不と蹴也



兩手之爪捕

双方実虚を手合虚の方ゟ合必ずさるゝと紀実の方不意ニ手にり右の手にて虚の足を取り透る左の手を添て揚て倒ス此義揚さる足を内のぞし向つき返ス事あり此ハ虚の方ひかれまじと足を引き取るを引つき返実倒スことあり此足ニよるべし



ガラス使用

虚の方前褌に取て寄手にて実の方の前褌をとり取を実の方乳膻中通りを

体ヶ堅張の入身にて前褌を引寄たる時は実の方上手にて體埋なし手付実の

方も我が右の方へ廻し虚の方取を中にかされては身合ふうしすべからざる也へ

ずかさせじと其向ふに取を並べ時実の方右の

手にて虚の取を己がたりの方へつき

たおちを突きもたちたる手を並べ手

虚のたりの足へうつりなぎ込押し

倒す時堅張の手つきは膻中通り痛を

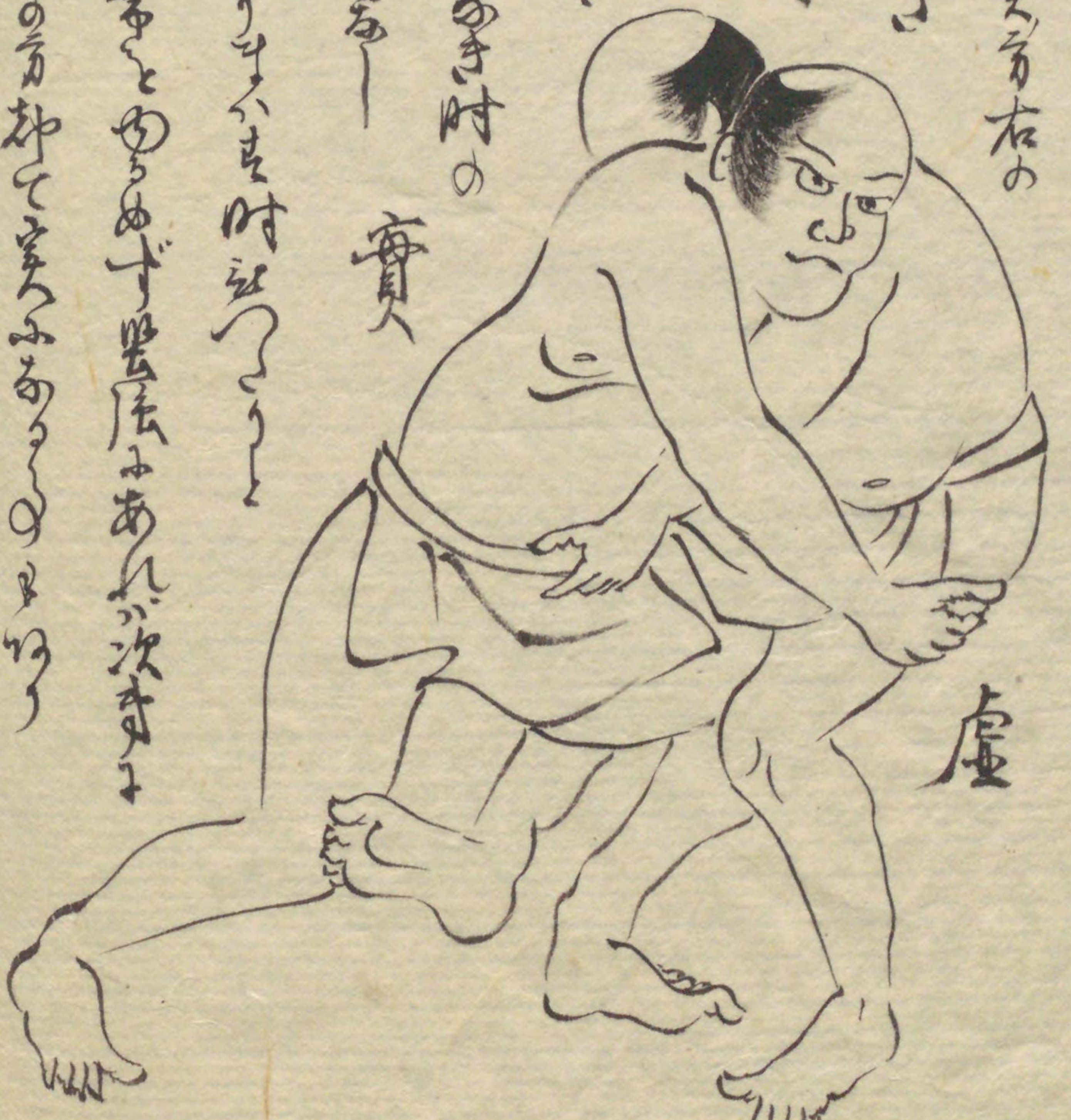
呼吸苦く後を引きあれ倒るべき極ある時の

仕方之取を張へわうせが鶏膈に苦をなし

蓋シ虚の方功者なれは実の方より手は其時取つきりと

取を横につけ已レ取をやとめ前褌をもちぬずも堅張にあれは次第に

実の方前れしに如何にもあるゝ時は虚の方却て実をふあるゝのみなり



上手之入身（リミ）

或は虚の方取を横手に付たる時は実の

方腋尾の前褌をとり手付は実の方虚よ

仕かゝを倚たる己が體をも寄せ己虚の方も

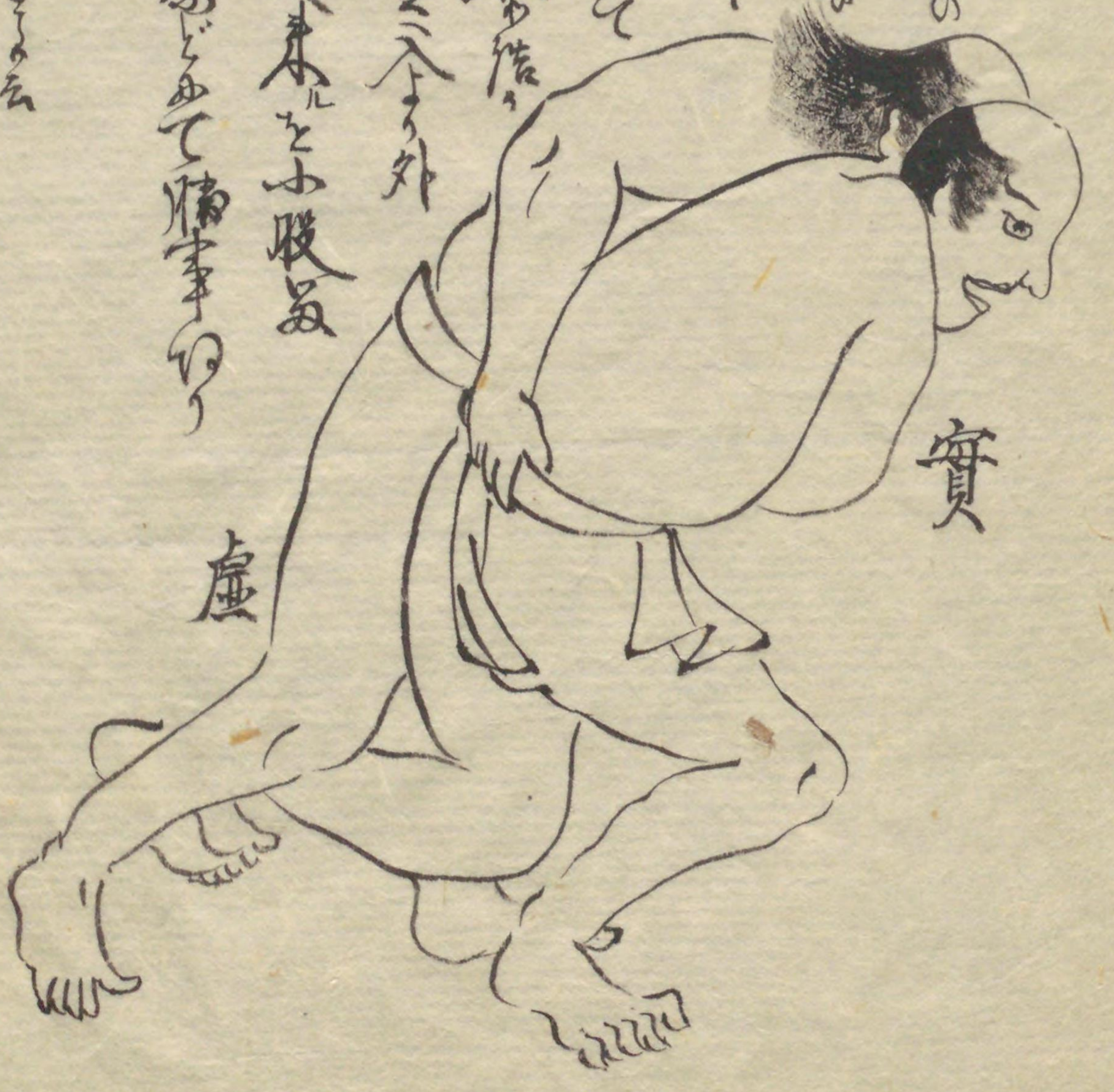
手より帯をとり身合を堅めたる手にて

前に寄掛身へ折れ込む帯をとなし一方結び

浪抵抗あけごふには危ふく実の方入れ入手の外

なし実の方は仕掛を倚かれは足へ来（キタル）を小股など

小傑出し身へ引きて其外なども構事なり



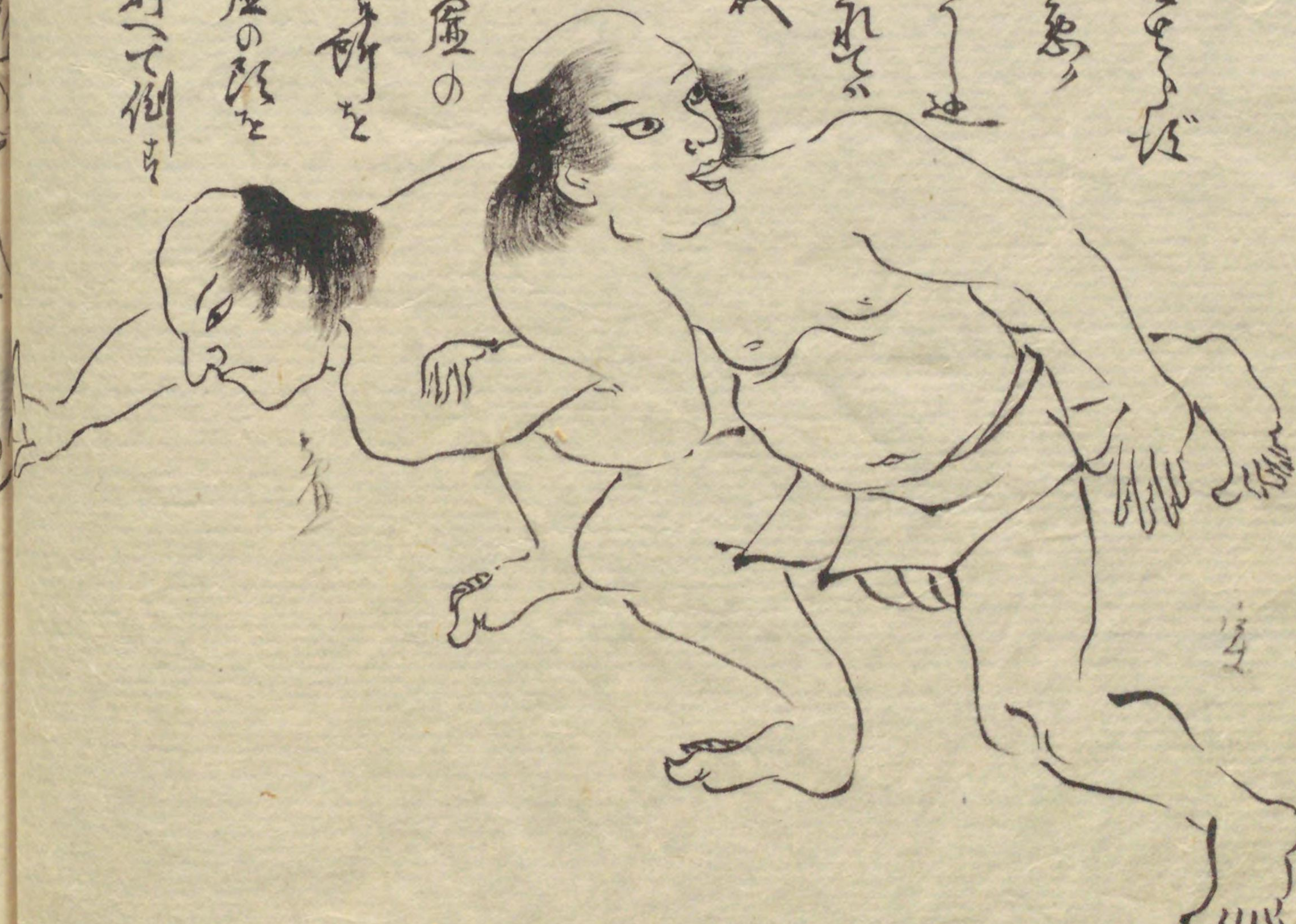
投之摺腰（ナゲノスリコシ） 今投よみ云

虚の方上手より投掛しぞとなけの身合を屈に抵て手をあてゝ実の方摺り

称して投ケ手也

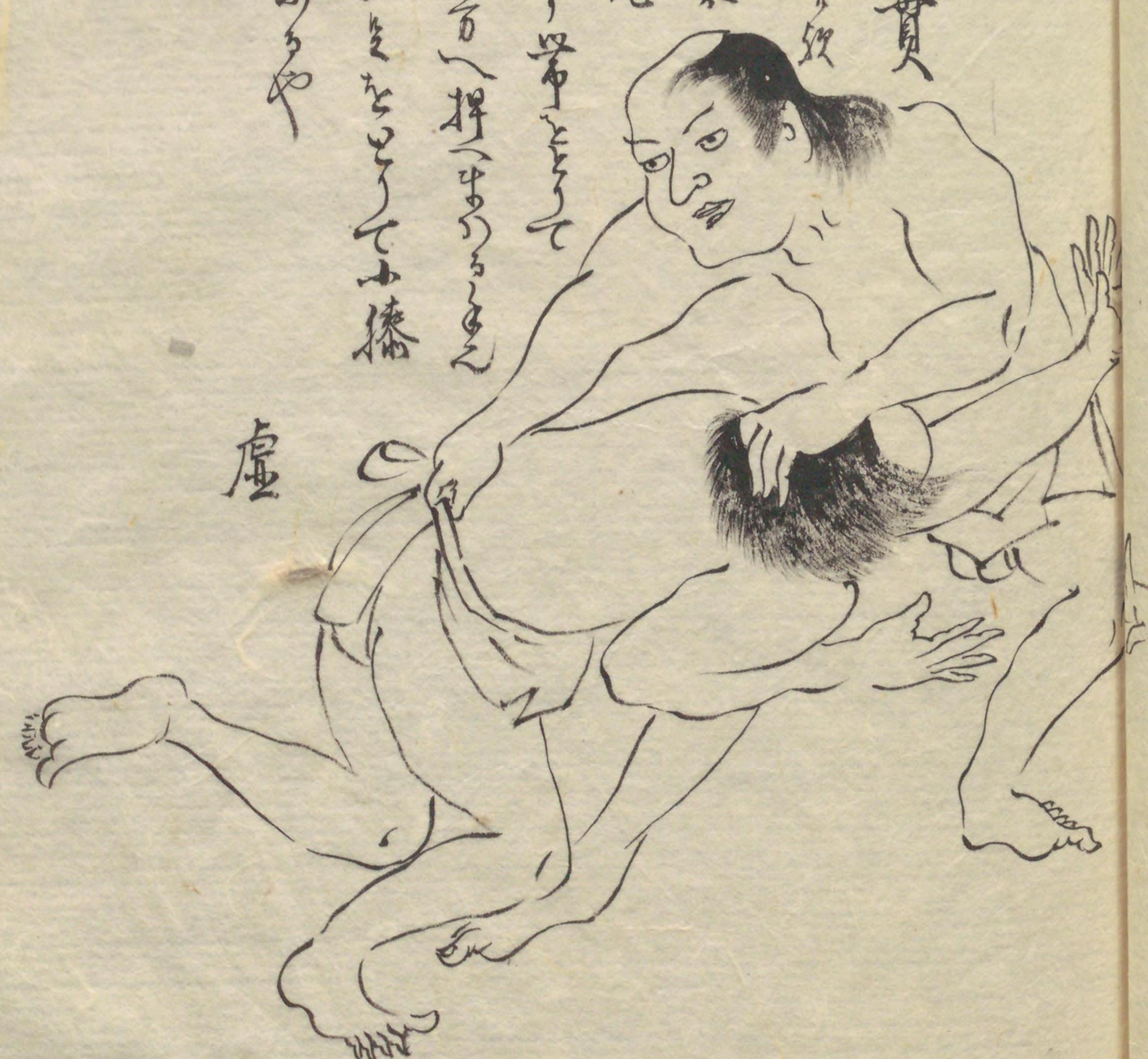
肩透（カタスカシ）

虚の方元来負（キ）に入しぞよいやましさまよひば
実の方は足子に気（ロ）ありて頭をさげ勇合急ク
相撲を催ク より掛 実の方右の手をさし延
延ニ押ニ起さんとする虚の方押起されてハ
右の手を千かへさし延ニ弱ニ成り放
押起されじと手へ頭をさげて喰だあれ
所を肩すかしにて実の方の
たりの方へ押出し或実の方たりにて虚の
むなもと手に添引きあり頭を催ク入来所を
肩をすかしにて実たりの手にて虚の頭を
押へ已ぶたりの方足を少倒而ト頭を押へて倒す



乾出（ヒシヤダシ）

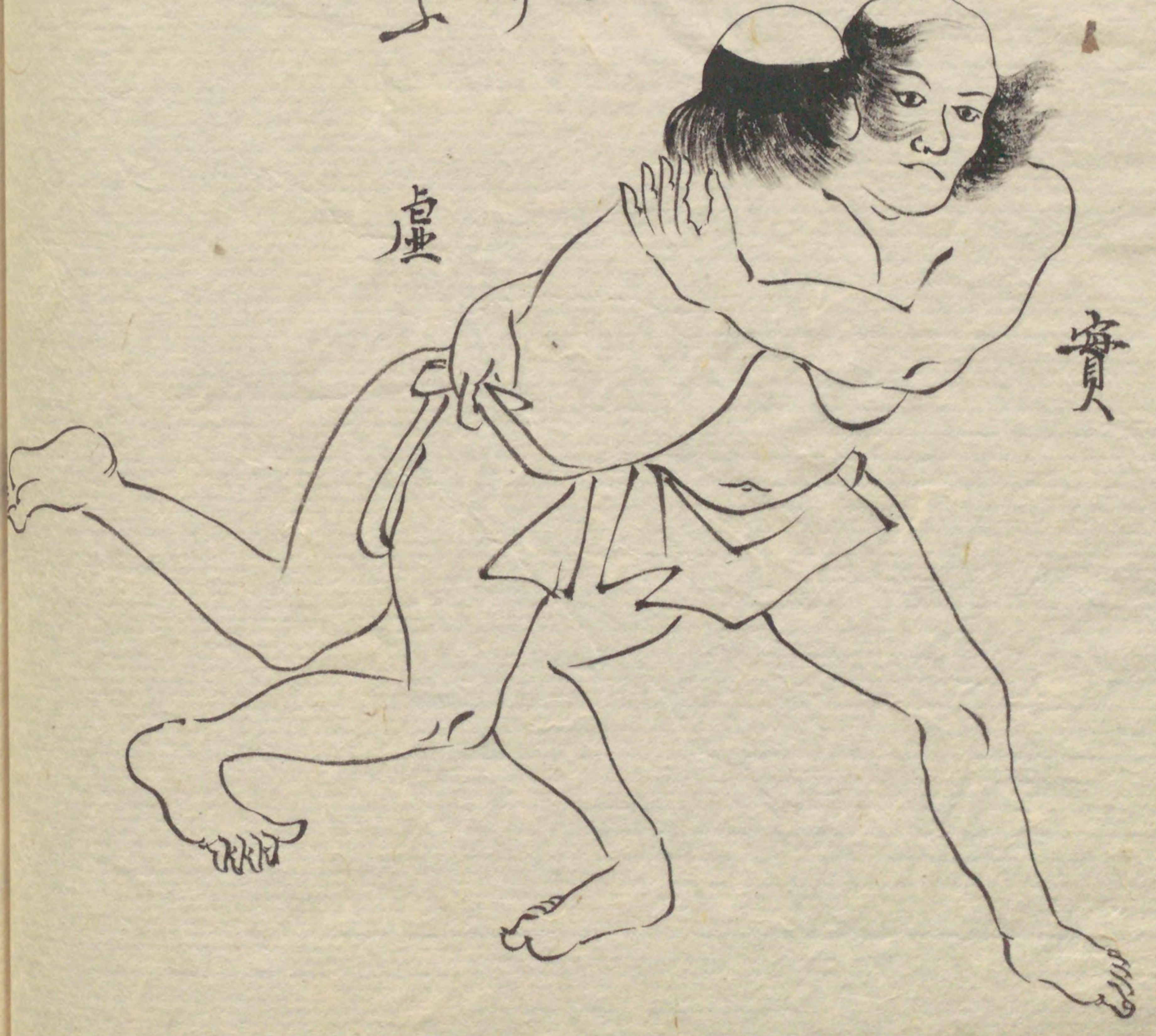
虚の方遠き足ニ
気口ありて相撲を催ク其儘
実の方は根へ抗ニといふ所
第へとりあはせをもとせ
あまりにし或ハ上手より常をとりて
頭を押さへ実の右りの方へ押へはなるる手之
此手にて虚の方実の足をとりて小膝
はかりしと云手なるなりや



ガラス使用

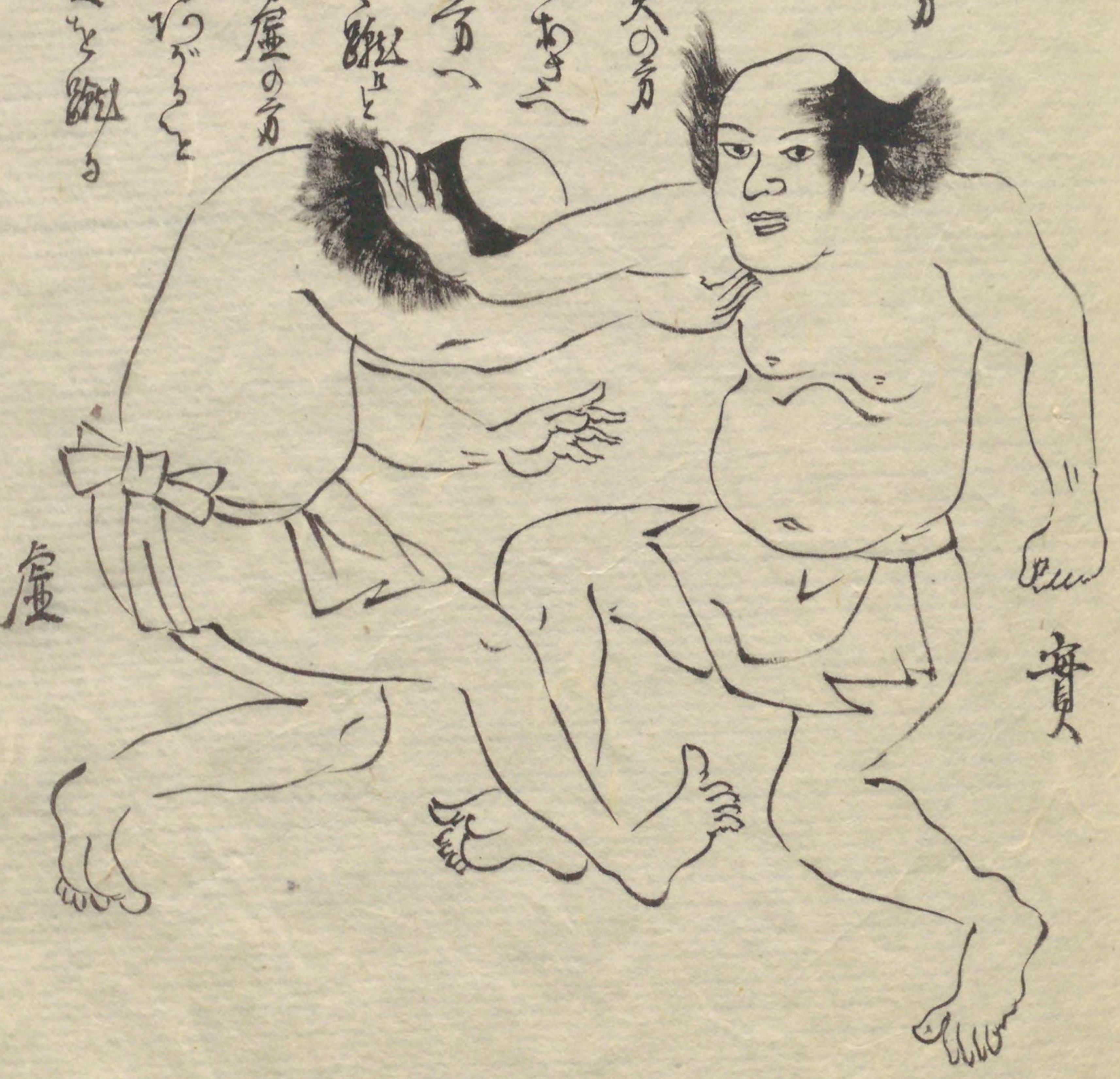
胸投（ムネナゲ）

双方にゝまに指合ヒ
互手むすびて押合ヒ
実の方虚を逆上サセ拍を出し
虚行ニ拂ル虚の方頸へ
ゆうじと上を搦りて
押かゝるを時実右へ翻りき
振り揚ケ投ケ重ル手也 ゆう
かつれバ右手を取ぐるといふ
手なれ ある也



蹴違

双方手を合虚の方
一ッ気に入ンと来ル
時足治定なく
御理上（ウハ）盛（モル）其時実の方
右の手出て虚の頸をおさへ
よびちがひて己が右の方へ
蹴て捨ル頸を押出ると蹴ルと
蹴ちがひると一指子之虚の方
右行に出る左の足ぬけがると
入て右の方へくる足を蹴る

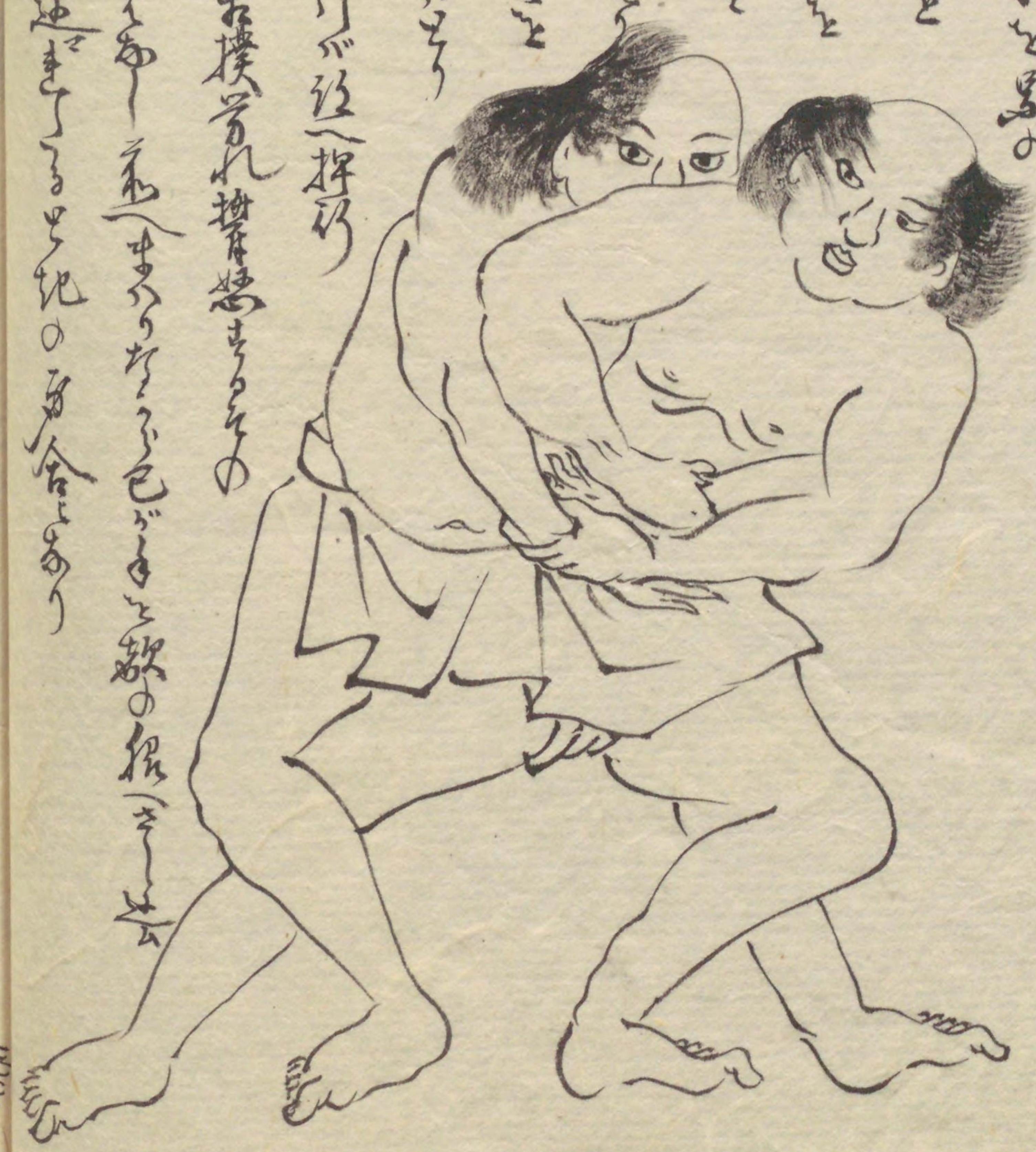


ガラス使用

多怒気之腹投

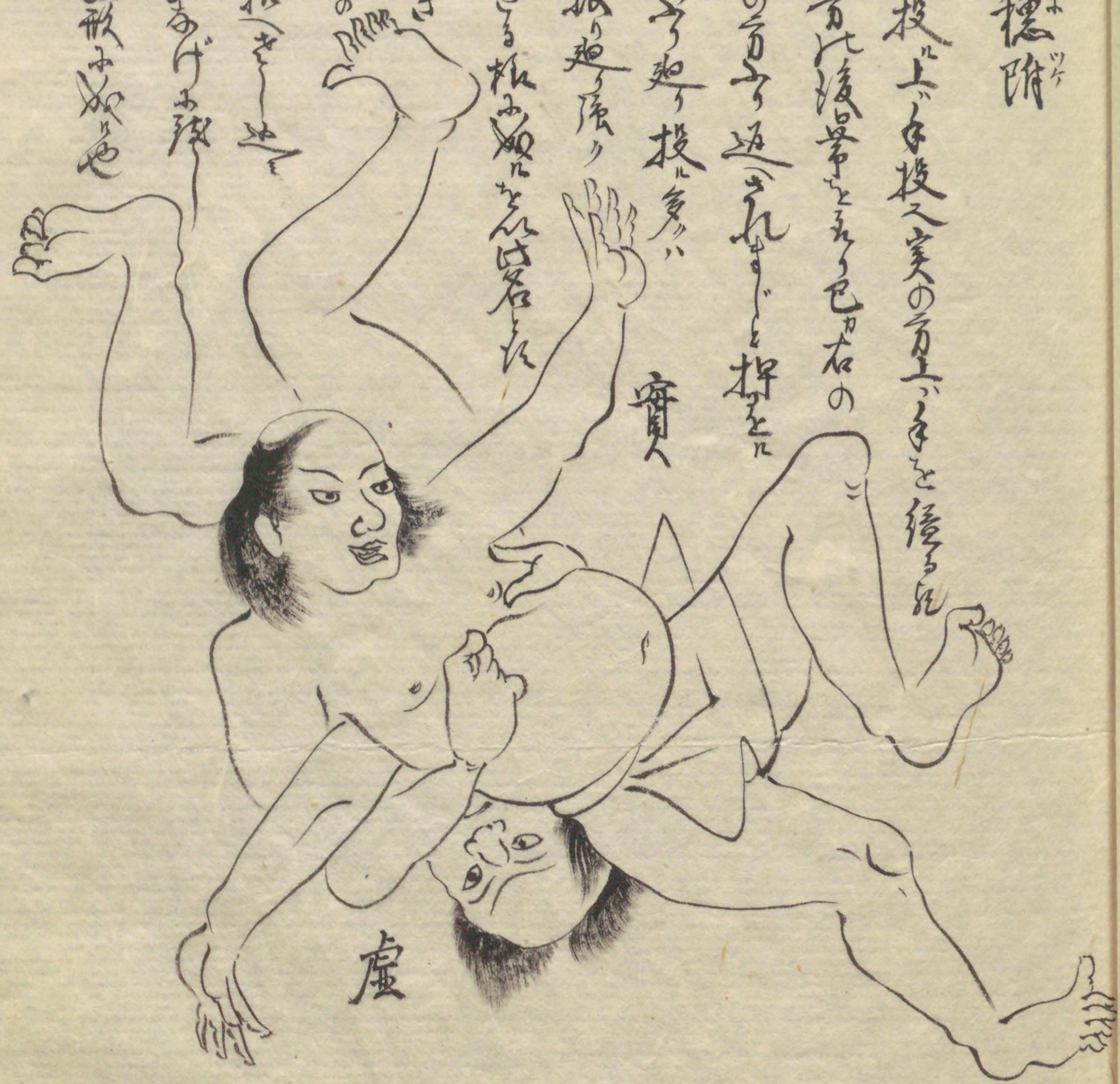
未虚實分

相撲ハとかく損ジ横分ケ手入レ後ロにやまれ抱留に掛らするはりて肝
要の相撲後ロに於ゐ手を出の
やしとり出来右の足を
差通シ小足を返シ體理を
せまり後ロの相撲左へ廻らんと
するを脇からの足をかきぞう
右へ廻らんとせば右の足を
踏まる後ロより抱揚る時ハ其
なる手を左へ押さるゞ後へ行ば後へ押行
前へ来ルハ押抑る後の相撲前へ掛る時其の
前へをうごひを絡まを来し前へまいりなば己が手を数の技へさし込
るとあり其ハ後ロより抱込まするも他の勇合とあり



空穂随

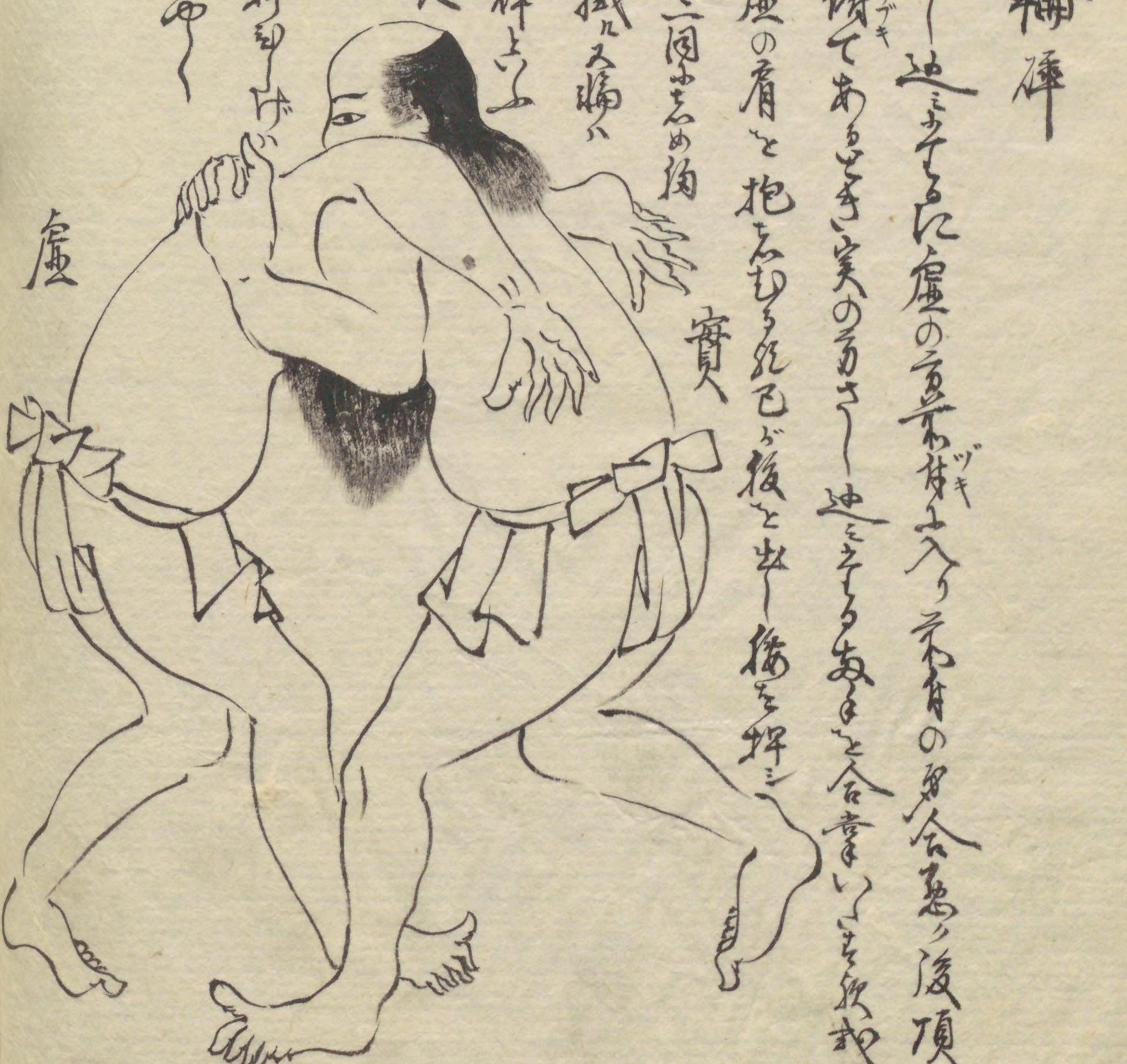
賢ヒ強リ手を揚て投ル上ハ手投之実の方上ハ手を繕るに
或ハ上ハ手より虚の方ハ後ロ常をとまり己が右の
方へ振り掛ル時虚の方より廻り返へされまじと押をれ
賢ヒをも己がたりの方へ廻り投ル多クハ
其の賢ひ張キ出へ振り廻り張ク
投ルと絶空穂を随る根に似れたれは名とれ
上ハ手投ダの賢ヒ（つよき）
是或ハ実の方右の
統と虚のたり於掟へさし込を
かいな投此をくひあげに躍し
てる賢ヒ強ヨリれハ此技ニ似りや



ガラス使用

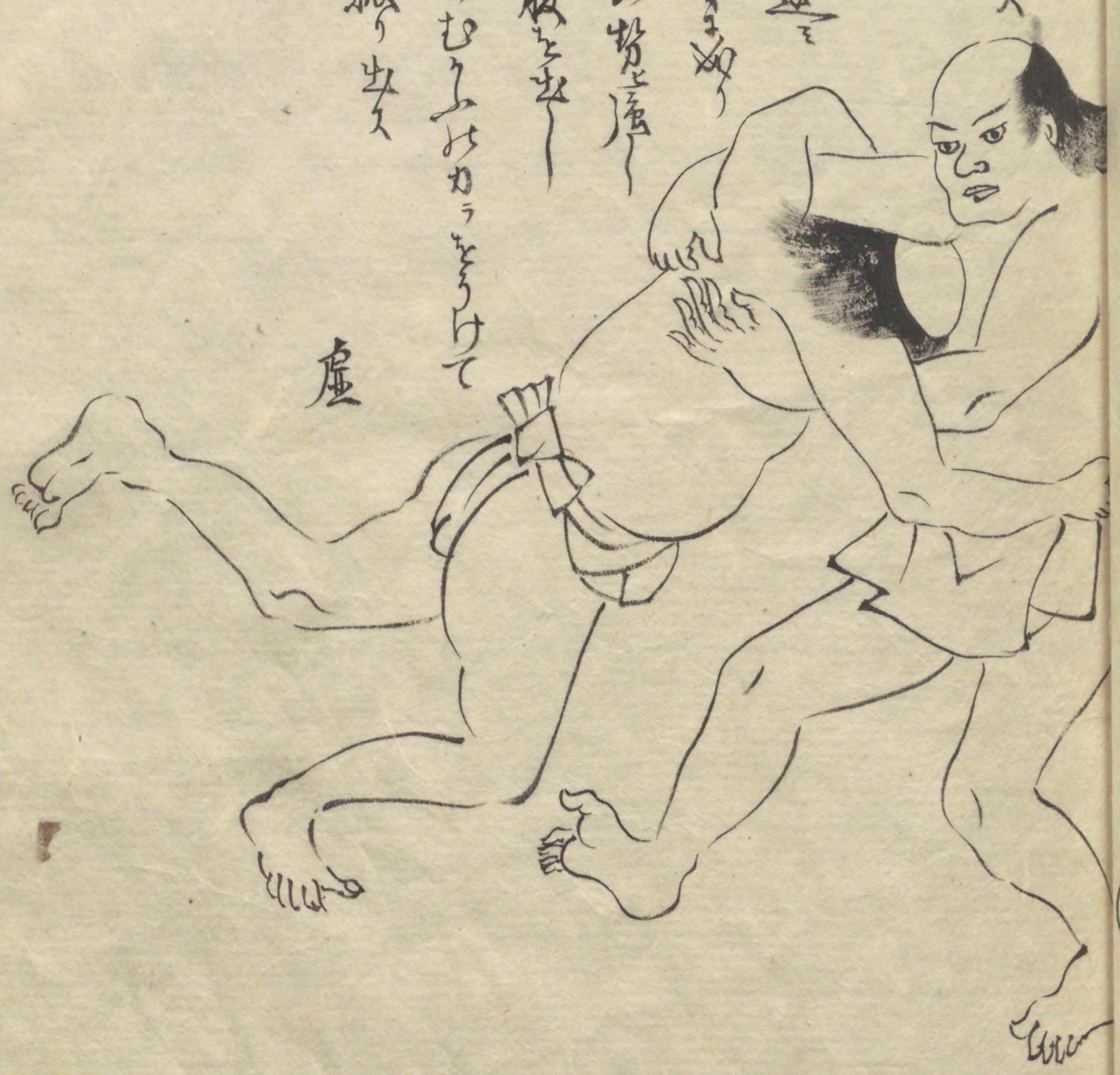
入輪捭

実の方右手をさし込ミたるに虚の方其手を肘（ヅキ）に入り左の肩の方合惣ノ後項の方を実の胸肩俯（ウツブキ）てあるときハ実の方さし込ミたる右手を合掌にして左の手ハ合掌あらざれバ虚の肩を抱込むる亦己が後を出し掖を押シ虚の頭を掬る様にて一回ぐるめ掬後を出し右足にて掛ル又端ハ又行ハ掻之これを捭と云今ニ准して皆右ニ反此方合掌にて実の腕虚の頭より首ニ掛り押ゆるげバ頭骨をそこなふ事有べし分ノ虚し



簇投（ヤカラ）

実の方右手を指込ミをたるに虚の方其肩に手を絡め実の右手を抱込め勢ニ虚押掛ルを実の方腕を出し腰張虚へ寄せ其のむくみ（カラ）をうけて左右浮手の方へ振り出ス

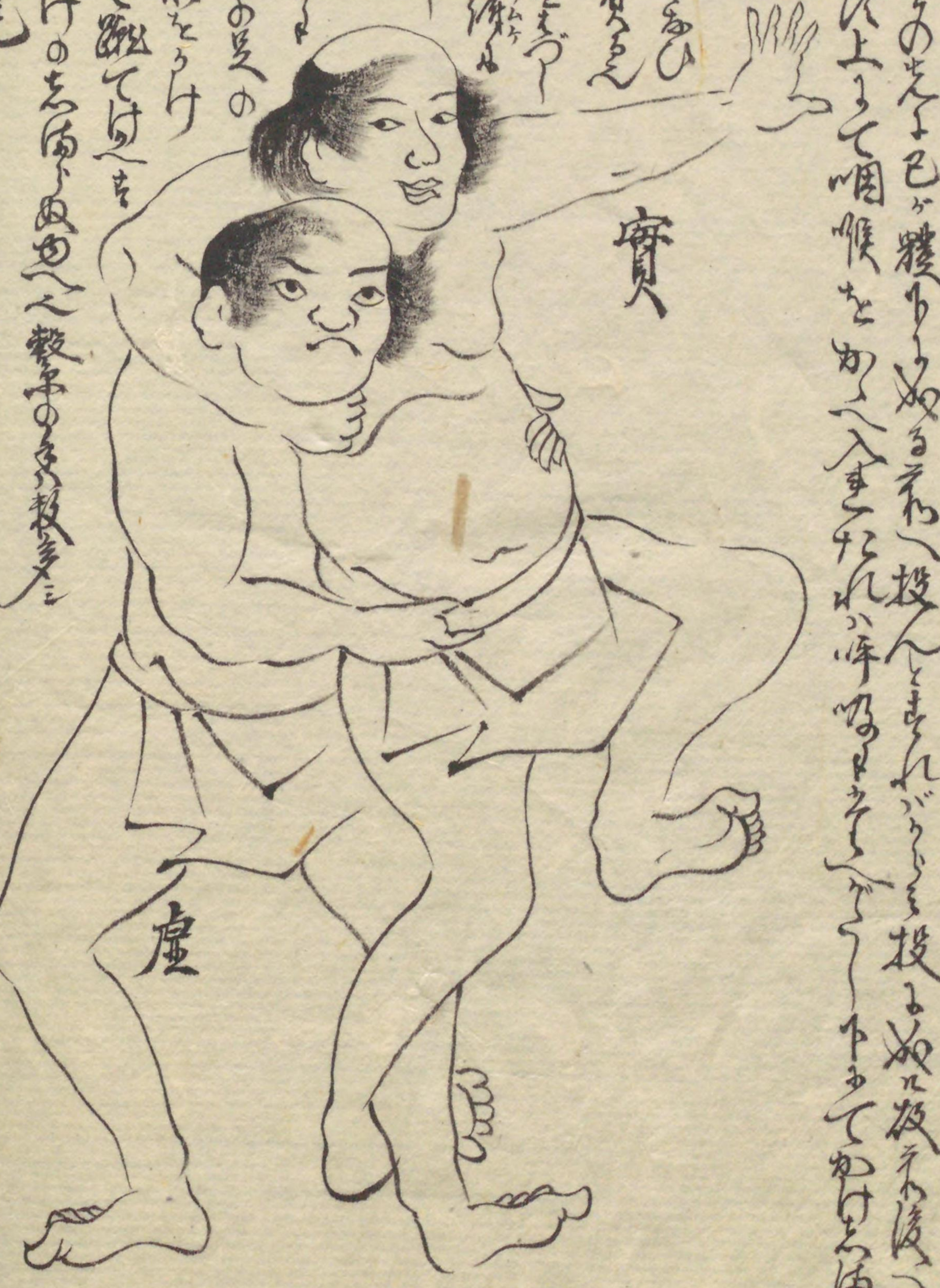


ガラス使用

よ
61
3

繫手（カケ）一ツ本立チ

繫手の手とハ上手か下手か上手のうけハはじく事なし後ロの方へ投にとまれバうけられざる事其の先ヲ己が體からぬける也へ投んとすれバうけを投ぬれ後へ投らるゝ事あらバ上りて咽喉を切へ入まあれハ呼吸を失ふべし下手にてかけるも同り其れバ足をさすらうだ相撲升降の理をさとしをひ次第く不曽れて直るべし下手の繫手ハ肩をまづ俯（ウツムケ）うける足をまたして俯なば第一へ直やしく出し倒るゝ事あり我か後をへうらすべしありまうけぬ方の足の地を蹴ふ事なる事をうけられざる足にて跳てけ足をるまねる是皆うけの志る也へ之繫手の手数多し



大尾

燕石十種

四輯　八

特別
よ
61
3

東京圖書館
和書門
叢書類
~~二九~~函
~~六~~架
~~一五~~號
~~六四~~冊
37

ガラス使用

東京圖書館藏

燕石十種第四輯巻八　江戸書會　活東子輯

あ川ま免く里

わがこゝろあふさうしのぶのさとのみくれとり有けろるく月日をかぞふるものありしが　かなしきぬとせ（浮世）いよさくらさく頃よりまろせぬたびの身となりまへことより一としやうハくさ風のまへのちりびあしたをすぎゆふべをまちぬあさがほのつゆいのちづまのうれあすを志らざる身となりゆく我めぐらぬとのさゞめなき事ハなごりをしさハなかしふ身にせるめくとたる事とももきもふかむ世しの　わきろくとありふこゝ頃をた頃を

東角文庫

ガラス使用

してみちあるかくふかきよしひきゐる座つくゆけど
二本松こえすなをつくふま川うぜのところぶそくも
桜くさくをぬのびさやまとぞくかしよつきしゆれ
うふかくむあり

わかきるく人めよさえきぬのびきさを
さなくふりでのかさくなりけり

とつちなけど桜しもこゝ八本宮ときけむなかく
ぬるさとにありしむかしのかとの名はかなどり
ものはなもいづとたく孫さろにたらくのひぐよ
見桜敷あさかやまふりしとよありし山の井の
しのび川まうけさうつきて我やつきまでうるかの
さうくむかしふるくのかたゞめまも

あさか山かげさへ見ゆる山の井とよみしたま
ひしとのそとおりひいづきぞやさしきとみき
かるなとしのぐらんひゐくのそし我さぞあけは
こ孫をもとけぬこゝろ山よしをまるうまなかむ
まきばそのかくもあいつ座子ゆきさしろさく
うち見くてさゆるぞゆら我すがて孫ひぐし我
見まぞなふきく由むかのこゝりあさくなや
あふくま川のつまのふもやまさちがれしふひく

ガラス使用

ひとのめぐるよもすがらわづかなるゞほたるいか
またしゞ川のあさきてたまろしめりやこゝよ
のやまふもつまふきりさきばうきさせのはくあ
なさきちよしの山のさとゝ深いでつくふしつらハの
やまさとをみるこうまざハかり秋世の山ひ我ふるさとの
くひしさハ同じ夜しよまされどもかくまなく
さむしもなくかり稀のところおほくるほたるあり
あつくてハしゞ川のやまなからかきをともあをせず
みちあるかたをきふべしおりひ吉田のたびところも
捨でるよあつきのたくまたなくあのうきくと我しゝ焼や

のびりくぐりし身秋ほたるいだくを廊ごしら
ざきはじひあるかく我かごしてよりいのさとの
うきてきるとまりさくめぬあつひとて泥ぐく
あしのをたよりとしうちこへほたるげハいつまでく
くひしきんよ吉田系花ハなけれどさくやまよ
かどなくいまハころ川なく稀もまよふうち
まとりうちゑのさと我こそとはいましゞさか
ふちをよもしつまてんとあさましくすゞきほたる
またれふもをやいりあひがまとうのこやすゑハ
すゞあのこやなるきたとびもこまもらんりしましの

ガラス使用

むりたへをぬこゝろにや日光山とめてみえてもの
うきたちを下野のむろのやしまにたつけぶり
くゆるおもひはまきひとりこゝろをつくはく
ま祢の嶺よりおつるみなの川おちてのみちハ
わかことくいくたまのやおもふらんとやまのさ
とをせと経るみ様かさそみかくきのたまきよりあの
うよ見ん経るをとり此葉志げるおもひのまゝでえる
やえそこゝろをかくさむ小山といはきをとさゞがゝま
かさらみうらぬ山もなしわきてもうきせてあきは
こきおもひのいろやかゝるらんろゝきはまるゝたなひ

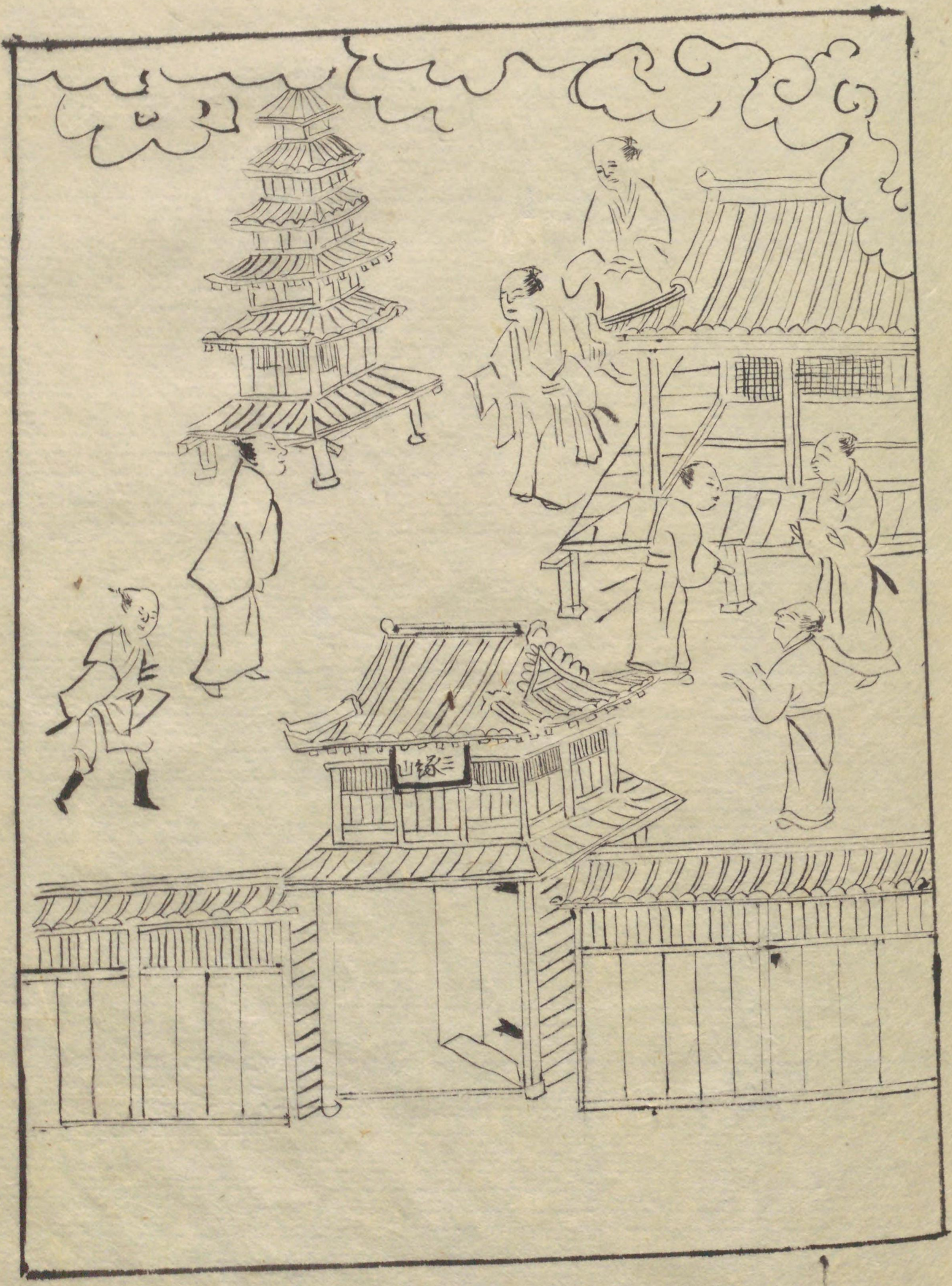
ぞとまきとけいろをたなぐさめてをとめのさと経す
きゆけどかまもこゝろふかゝるらんまだのさとり
まるくとさひかまごゝろも様でさむきあきおもう
すのこゝちするのけのさと（里）経（路）まこゞまききてゐ
こゞくもろともくりむしをわたるすゞきのこその
うさをいつさ川てのさとたまやこゝろ経まふ
世の中をすぎしとの里ときくからにたちよるかげの
あさかやまよまふすかゝめよやさしやなかこゝ乃
やどをかす（柏）（婆）てくにふさやこしづくのさとたまきばしある
人よそ（草）ふ（加）うをばなごりおしくも志んの見のあけも

やらぬにたちいでゝ八つえのゐとまうとりふなぐし
とほるみちをゆくむぐらしげんじのよもぎふの巻
いゞのひしことのまゝとおもひつけてゆくずめり
しのゝめにおきすゝきぬるあつはきふ
　かすかなるはゆけきゝもぞふの風ど
やぐやうにゑいじまゝ紀ゆけハなやかりのぐと霞も
なけてあきぢかまゝによつきまよれり
　かのぐと　なきぢかまゝのまくらごろも
　　きてハうつゝの　ゆめですゞみすし　む
とゞたへぬおりひとをし川が多ハやんごなりのまとのまし

ひぐしこ小塚の川のをゝゝあそゝるめのめもなそぬ
田の面ふうへし平笛ハかりのますよくらぐとなりて
いゆハまやしやくの木げけのするしげるかまえ
おりひのするにしもりなゝぞのこまとぎまくゆらん
めくまことも多ゐそりでゆく程いうりとたちら
つゆのまゆすくまむきふあき草をうちこえゆけば
かともなくむさしの江戸につきるれり芝品なる
川のさきひな竝をとるゝをゝ太びとけちや
風のあゝりふやどをかま月日をありしくゝを
しがそてりとのうきたびの多共くのむたより

ガラス使用

もはらばかりあけくれ志げかさびひとりごころ
なぞさいはさびしがるのいとまうなくもふるさとをせい
つる月日をうつろむまどかくらぬむつし志らさ
らぬ枕くすゑかなまはちつつるくめをとうろえそえ
ばなまきげようまく時つまとまぐる
人のかなさけハ世なあまし など
よくて我こまきハいなまきこうりと（問）いふくさむるハ
るしあまりきびしくありかへるやどをとうちい
でとをり町うかすぎがしをうちまうりゆんでを
まへきべ増上寺ぐのありてをたなむまばこえん
ふとうくれそりさて本堂のまんろけなハけまん
のまへのかざりなくたまの我やうらくうかなりて
ひろりかがやく紺あふさちさなの地のさそくみだれ
はひてどこのびちく石のくどとかうのもぶうのたちの
がるその枕くすゑをなつむまばみしきのやまる
うつろひゆくゑぐのらいはまんむす海老ハぎをするも
こくらくせういうと月をおとろうてきろりなりさ
まきはあそぐのいすしつぱどうしゆうこく のてん（帝）
（王）まうどまんぞくなうしと申もしがやんぞうまよし
と申めるなうじ 一人おハしますてさいしゆうこく



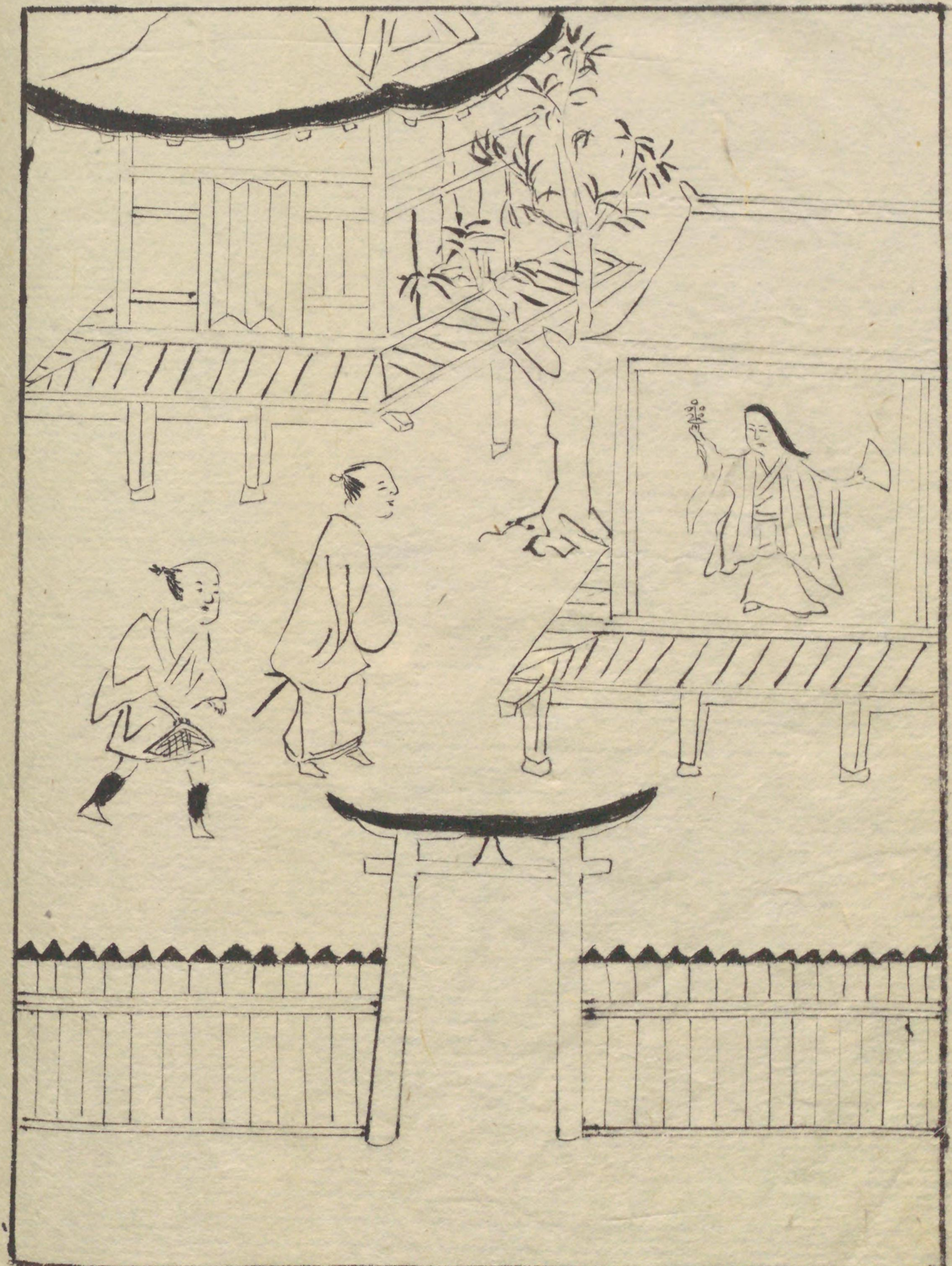
のちまてのことハたいし（太子）よあひなりてわう子二人
まちたまふ子孫んと存てみちふをとゝめたいしの御ため
めつこじをとしめりまのたろとしてしやうぐくふくと
すたまひあまざとぞんじ千のれんぐりんと抱ナしたまひ
つナまくりんといあひなりてあとなくなりやうひれるとと
免太しよゆづらるやくし（薬師）よりまらいのむろしなりれ子まいく
まのたいしまうくりんでおんともあつのふつぎまちつ政の
たいしつうせいしわきろとなりふのとりし早くうらんと
ころくりんくりんのちひとてだんぶとまえれちうひい
みちのあつきくわとはまくむつやうじ也紀と出村こり

かくありがたき仏おはらひそうらふ ほまくまろず
して初夜よりごやにいたるまでかみおもあらしき
やう（経）あんのやむことなきなうあり かるしゆ（珠）
しやう（勝）まひろさまそてすきてれきるられくるさもと
きようしてたちむかふのてこて我これハすろ（秘）て（朝）
うのてこ我じまりあるところやこのたしまり
殊てこまりもまさりてすえゆる増上寺まいりやう
いりんせんよいちとあさてらとうしくかくまきうう
ろあうぬすまこらまでしやう（生）ハかあらまて死の
りとひこの世ハうちの中どりありもとゆんとそ

はぐこのてこふいまよりのちハさそこぞあれところも
よきをもや川さぎやせをいとまんとおもへども
はそがぐまんのまうあそいはまのともさまいてう
てハつあぞもとあぬとんよくのもこられぬて我ハ
うこてけきやうくゆけバきんめいのとう井お
うきせうちさてこて本しやふなまきばみこ（神子）の
まいらぐこをそうし　たまひけり

ガラス使用

されはかぐらのはじまりハ地しん五代のことかとよ天照太神日月をうまでひろひとくいろはせんあまのいは戸にひきこもりてこそじやう（常）や（夜欤）の国とあるまのうかりもうおりかしはおもしろくはうといひしんかぐらをたくさまハやしは神をのふじかましていさことをひくきかふときくおもしろくうちはさし文をく日月ちらはいづ成とうこくうはあぐりかひもる日くきそん乃こやう志んとて むをながめてさんの国山家はいまひとそすうるみていふせん志んゑんやまんのまて



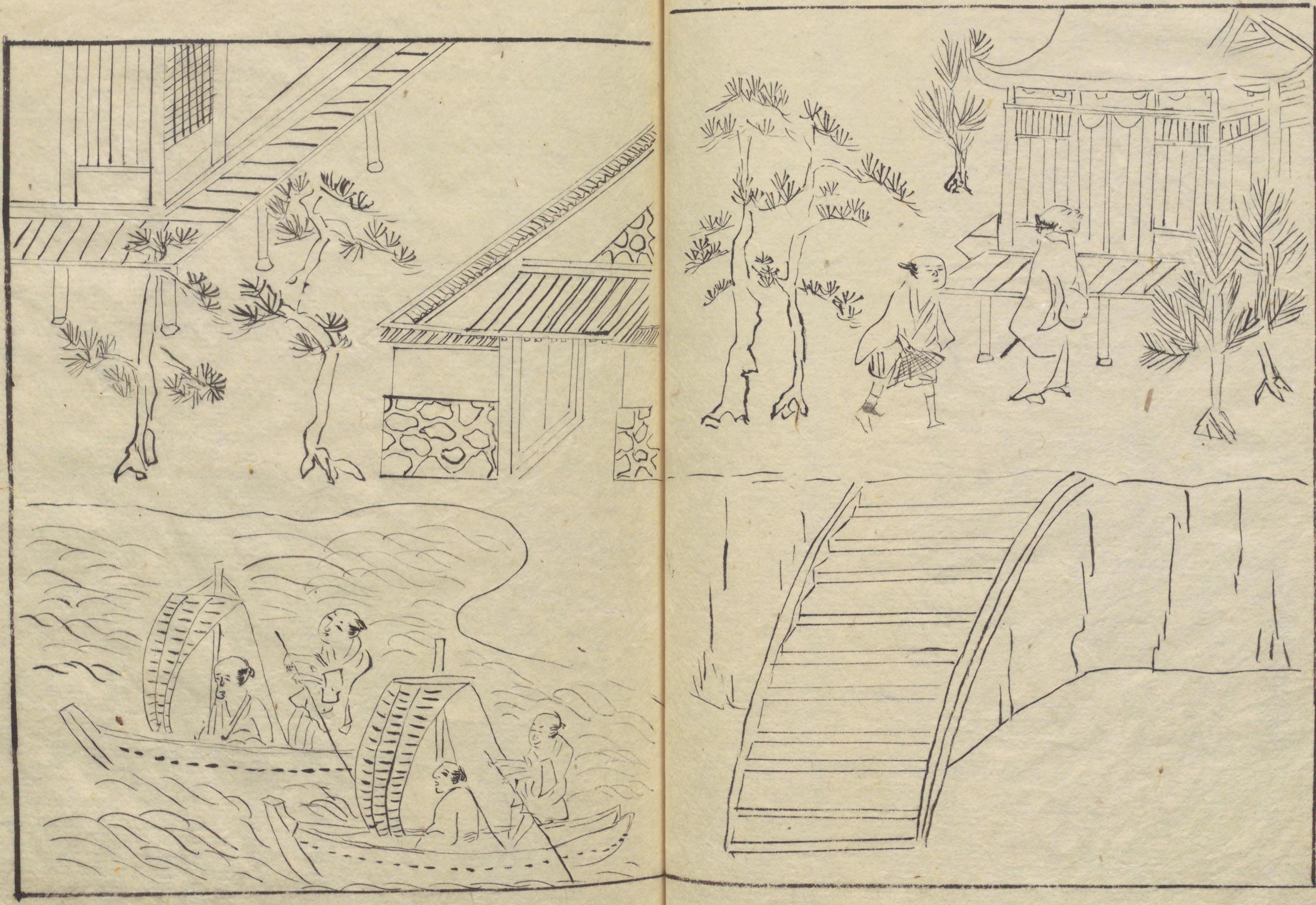
ガラス使用

ゞらをまするのふるさとハむらやうの孫ぶりを
さ海てるりみ人のかぐらあのことゞハあちれみよ
らいをたのしみけりきてハ八人のやをとめハ八乙
ゑんのとくをかくどるをもてびやうしさ
流くのこゑハてんちをおどろかし神をいさめやう
まことにあやひさしき八そのまゝなるもちおもし
ろきよといふことハこのときよりもすぢまりあ
ざまでもちゝぬところやまいまやをひらきたまふ
ときくのおもての志らごしとまんくすしきちその
まゝにおもしろしともつくまりかぐらをもすぎて

宇田川橋

志んめいふうくさやのをうけまくもうづく川むし
しまらしかしりゆんでそとまんきば阿さご山きうた
うけきバそみふかくつみんの雲をあいおあし
あさ木の志ごハ都をあくべとてちまへあるきもし
きうみ力縁もひげしきるうむきばまんてくらり
しらいしゆうま園下のあきゝもちろくまよとらの
ふ手のかぎりあくきそふをひてまかをあげそ手
のぼりくづるや丸縁あもあさきなをまさつり
殊ふ手こぶまてくまのやありかんすみをまれ
うまなあづむきハ投柔気ふそうをてくきてまちすまんハ

ガラス使用



ガラス使用

山ま（端）はうつりましませバしよてこふひゞく入相の

かねもうち過きバ四ツやとや月のくまなくさし

いでこゝよひをてらしあふ坂のかげをうつさく

めいげつに清ずぶのもりの木ずゑよりおちくる滝

しようろあるこハましのくやしや風どるらんさき

ばせをんのかくりまも為ハくやしくるゝ身をよまする

とりハ木ずゑをしたふとかふしてそこハいま

きこへり雅もこゝるなるかくきたるきめぐろのふ

どうこゝやうまうハちりひゞたるにましまちば

きせんくん志ゆハうぎりなくまいりかりうを志ぶ（澁）

や（谷）むらこんすゝりざくろさろりこそいゆハせるべの

こ衆しさくられそこにあらてうくきゞの四きこの

せきてとそくろふところをとめてるずむきばさ

くろ田さくや山の手に出入のほんたちけきバゆ

きみのりんとみばけくりろゝ新そうやきくきと

しくをあくごの山またちよりてこの小のまんうせ

ふきくそくすぎく身にしぶくとありゆくすぎ

抵くまふ志んずしのころにつくろふろげまん

きばをところへさそしまずくろるまじをさる

くふあでのむきハさきぞろ　為ぞくの名く泊殿だくろ

ガラス使用

ふびく物

まんざいのうけましもめくやとおもひとくく
なるひざしをこれバこひさ町ひくふなびくや
さしやなさきバひつきてなびくもつくる嶋ハ
うちまひのきつく手まとなびくなきひなりめく
田のこゝまひくあこはまもくるなこまなびくなり
太刀おりうこま金銀をさしふつこなげひくときくハ
よくまなびけるなこひなりふあハさむさま風ひけ
ハ小袖でふたまでもなびくなりせぐやう（旋行）しを
ひけバころつうい（乞丐）のなひくふびひをつくるめくるを
のゝ小まちのりましくふ

これしこゑでざれのうちが扇のしきとゑび
こゑひしとよの扇をおもひやりきてひきまれあり
あさとまりうま扇でひけバなびくぬ人もなのつき
きうきさきバちなびけるゑんなびくまひきまひハゑせみ
なのうしこくぬおもひのうゑしやとそそでひきく
なびくこともひりつ丸之莚えんあこ屋まこちとき
のゑひなのふことよもそてこころおうちをひきこひ
うきぶれひふなびくてもありめこやかとけ
ふさんけいしちや屋のあうこまめ紙ひけバ兄そ
めぬ人をなびうするあひの法ひをりよかして

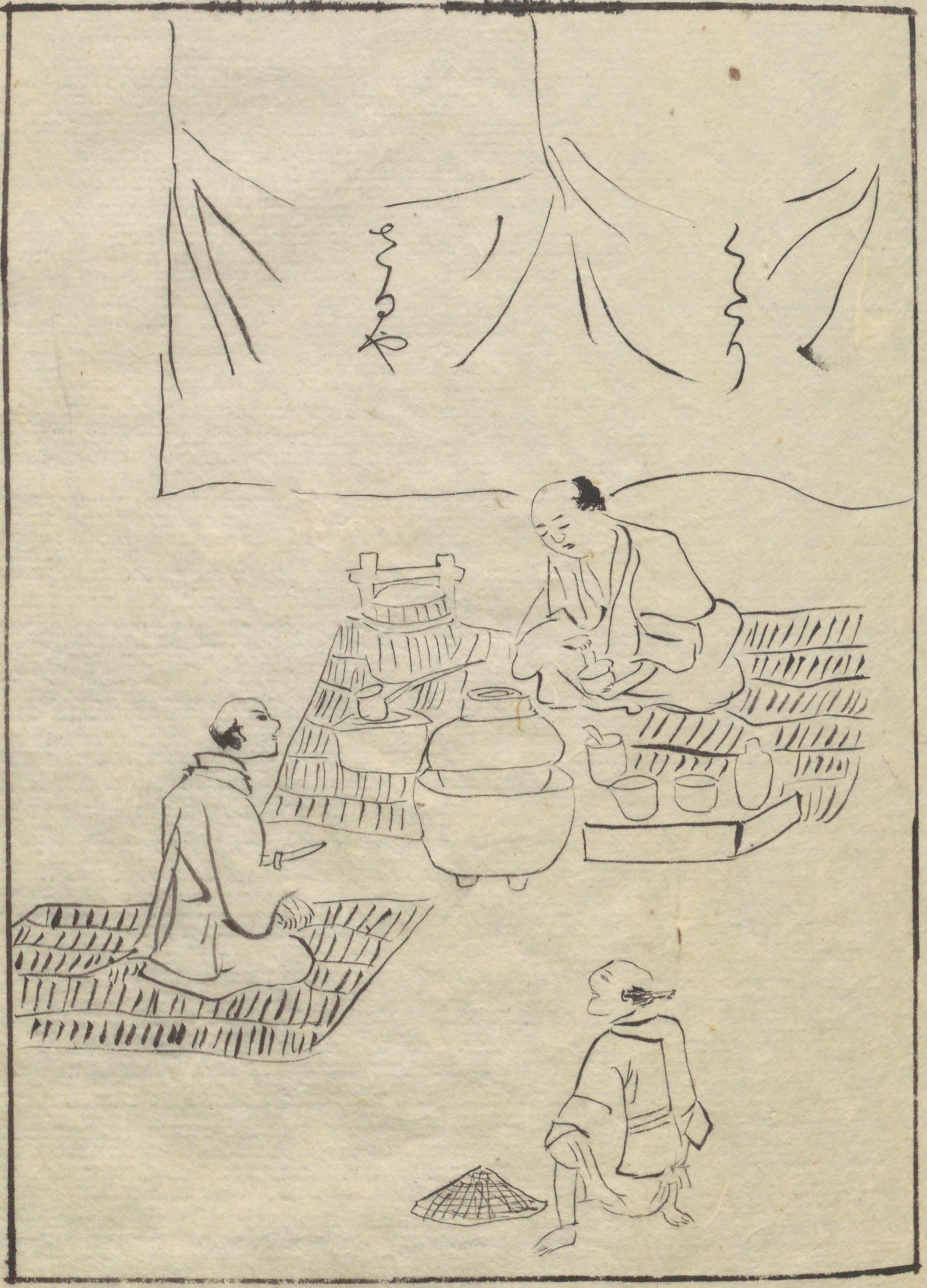
ガラス使用

あるひハふミのこゝのまへにちかのうしろにはう
祢ども見るあだなりけるこひゆくまうきみハ家
ふかきおもひのうらミ本のところなくおもひ
ひろげたる八まんのくもでまよりのさおもひ
おもうさてもやつゞききえ川の身は拾く乗ハ為に
とゞまるもゆくさえれどころも種めきてゆく
まもなきはりきるをとるもおもなたきえかん
海つるまでかたとゆきくとめておもひし為とくる
とそくるをもあまきるひろきてそのかずきばく
どるいまみぶきのいかにはかぬるひきてへんど

ふかく我らうきよをいづる　わきこりこゝろを流し
なるはりそのうきのまへちどりふきかへすとて
あるをやらんまことわりあるおもくハおもちぬところを
を種ハくを本あげにつけるまへしのうち
とけゆくりやさんとくろきまかせてくるまづく
きそと見るゆくころこゝろさこうれ田にておく
然るにおもひしをはらぬちぢりにあるらざうの
このてがしハ二おもてにたがひに見え底なやす
まつひよく（比翼）れんり（連理）のゆくひをひらきて家
むくあらひちなりさまハまろ身もひろげやとつじ（辻）。。。の

ちや（茶）吁哩（賣）の種をたづねてさぐりしまづのうしゆうと
くわいふうのりのよありそろでのびんじやのいくふ
むまれあひともにせすびて山城こくさうひを庵
ぞてさくれがしとこゝまことしぢのめりげみると
つうひたそて来りいぬはまゝやおちや（茶）のめりもめ
こぬりのなまきふるまひあくうしてゐしめた
当つきいくりしやまがくなりしこちずゞら
おあしまさぐやつきぬべしおちやのめりそ
なふあくぎこきおしめそいきでうよくちやすん
二ツりしそていでゝて又ましこゝまでめくなくあまだ

めしよりして二ふくまでいづくもしことのほかしげ
さふらはきは六ツかうまでとひけきべていゝしめこく〻て
ごびんのせんじやのいくすうまきあひともにひき
ひさやうやうし二ふくまいらぶはふくしくともひきさ
ろふまうまでしこよに二ふくよしきあり我々まち
くのことわよぞなぞ大だんといひしん八まん四千
みくそろをばのこらずおんくまんゐるまでし
つりんのりのどをよ六まん二千つゝくつ二まん
二千をとゆるさずまで来て我々のちのこしとく二
まん二千の神んまそのぞくぞくだびやまけした



つまりめんねうつみとゝのへてあざさいぷとく
しうすしやきひあこうちゑまずまりさちま
ちいさくびやうぶよりこぶくやすではさぐるの里
ますくつふくはふそくとてこふくふこきとさだめ
ついあの世までもつくりてこいちやうさち
やとるづけくりさまばちやとよむめんだと
そだびのたびしとくでさうつじとさりて茶ち
やとよあはま本まもあんと本まもあくちやのゆ
のとうじ十二いろこきもやくしの十二神一つゝ
まいさきのものなればこゝろうきをづうよ

やさゝみてなつくのおちやをとさゝしめてえび
のつきをやゝるんとなくさあかふところし
やさしく見くてれくゆうしさまばやゝしをく
ちあさけまハたまゝをちんしむすひすてお
こりおしさにめぐりあくしそうなびくらし
かりさめハまぬけのめをのこゝつるゝまうかき
てあづりめするが山下町をたづむきハすの
見つけのかりんよりいぞで入人のとりぐよひざし
まうしるぶ町まで大くぞまゝすしたのひうり
うそみをこぶまでたものしふふきゝる田りて

日影町

○たけ山町

日かげちやう我まゝ我ゝたまきもすゑやむし
たちさつゆけどまきおもふ人はひとりもえん
や町めぢぶしさしてゆくもありこそまよあく
るかゝ町のさろひとまくるちるしうやたけ山町
とゝくすゝふ人のこゝろもゆかしくれさんまう
町よ挿くをかりくわ男さしてひもありまき
ハするうのこびをたてゝしをひくゆゝ町と
いまさ我ゝえがハちゝまゆゝもしちげどう
まいとつゝきてぬりぞめのいろくと見るめし
こゝろひきとめてゆゝのむゝのしとゞづめるり

ガラス使用

そのゝち天ぢくれいとのしよてつはんわうの御子
そうまこうまんぱうとゝ申二人の太んか
ありけるが大あくんとてこくうつをとげき
まんまのくもぞしらぬがあらんとやんごとあるおり
ぬしそうの座王よぬしぞのあまそゆ。。西
川きるさ八寸しやく五寸よし又こそあけさ
ば薬もまへまでうろどえいらんかよしくて此の本
みなまことなちつまりて此まゝをめげなふるこそこ
の本ふいらよめけいでてありとさてゆづこ座王て
まことなりてありてまくてよもかりそたいなりける

ためしまいやまのそとたまひきぞつりてこの石をそら
るくにへきて此の本あまらけをとびひさかきそ此ふ
うや一年あまくくりこれをとりあげ悪人
のえんらをたいらげあたしとるや又しんたん（震旦）はくらう
ていの法代よりもじかまるまがてうハ異國とい
ちまつりとそうふじんぐうくわうぐう（神切右皇）ハのちまも
ぞうのやまてせめそめてありき天なつく地ひ
さし あめつちくまをうごかし國をて
やうよありけまバこのしるくちもよしやまりて
ところのまつふ世をすくる為ぞしゆけバ君が

ガラス使用

長崎町

代ハながくさき町ときくめゝま人〻ぞてまゝぬ志
川が身をいろしつゝおけ町のあんどのす
西あなたむかとはまりて又つるやぐ我く町まる
いふざくにたえつはまくうのなおどしあそくれハ
あぐのこざてもいろづきて千然ぶをまなぶひね
どしの元日ハめぐるみやまぐの木こりすゝや
くはりさまろくろいとおどしすぢめふときら
びやろある月のしのこてその名ゐうつろくふ
まのすゝきふろく又くもるが八町ボりの中くそ
名ハ朱きいりんしめとそゝくくりやうりしゆけバ中
ざしま先ハめてしさき河ざきのゆくさきに名ひろ
そ町なめぐるくりめらぬめゝやとうちより
又くまば志津が身もうつろひやさきそあまの
やはひりあもるらちいろまてすう手てくいまハあ
ひらぎて身ふ志らぐしも我もめぐるをおりひろむ
まばむしちさやつ入おりひふくまきか（つ筆）ハやの
とゐのころまきろすゝるごるせバくやまる
す手六畑しぞるしびぞちてむかしの沼女わり
くる（糸）いそやめこうちたなりとこゝくわどまむかしをおりひ
つげけり

ガラス使用

天下一

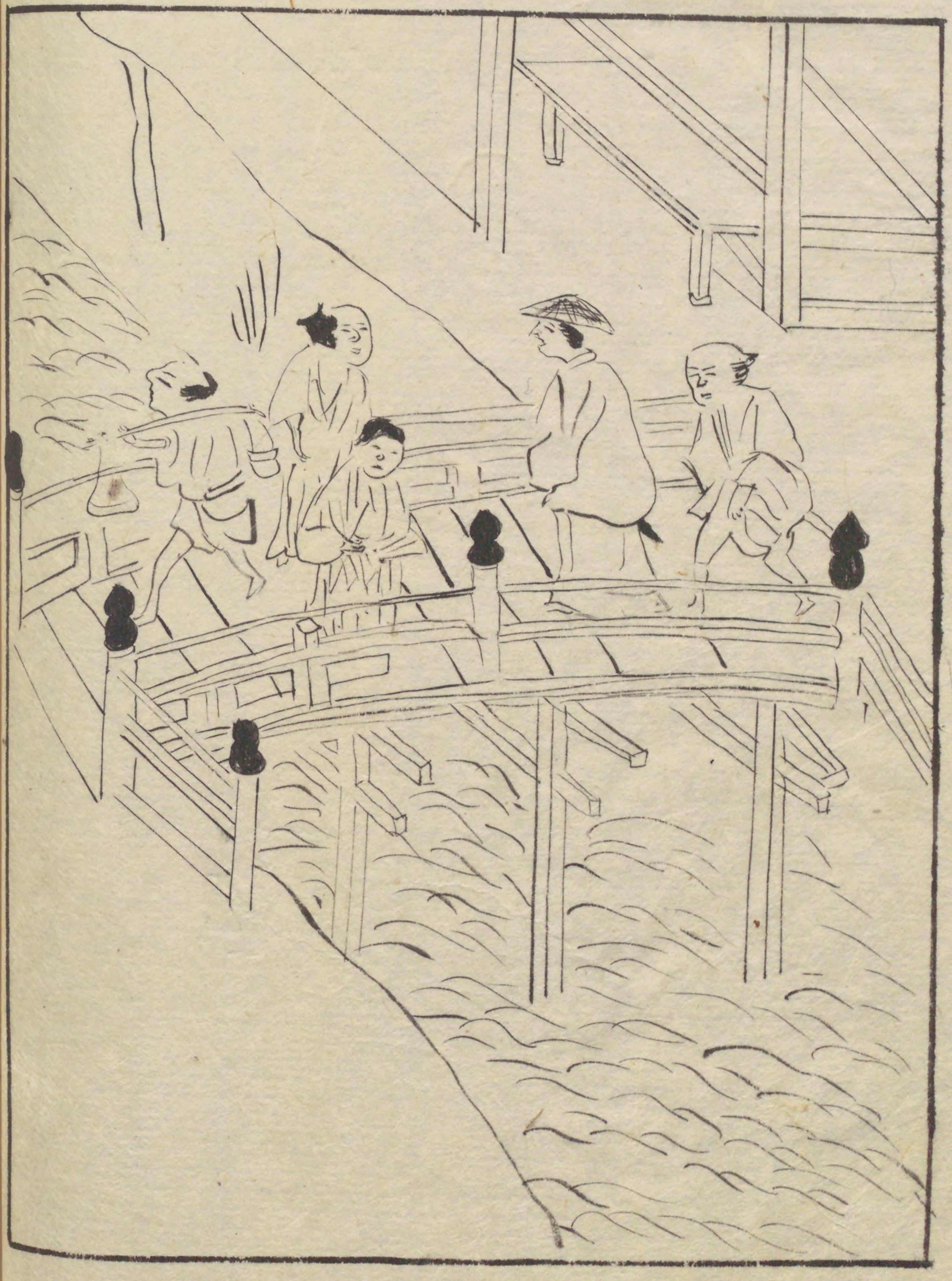
御らいとのくるわどるゝバと申れバ
くのなさけハするこ銭あれ
御やうをもきくところハわきまへしやうバ今
ますなさけ阿らんとあるうへのなさけのある
うちすきば本在御料理のくきりるんぞん
御うやくらうし相年和の御用すゝ年乃
天下一として御をきれる御んぞん阿やまく御くりも
里御まいりのハひやうぐやる新年古年の
けるゝくなりとりまへさへのやまハふたおりとを
そく御めますまゝあるつまありやしとそるゝの

そくまさし御ゝりひろしを見まバはくやちやう
すくハ花しまり町とやさろふ阿をかのとりしふ
御いろぬいろハ花方のきさをの御かつなかきせの
多とくなりもりしきへ本所中まもこゝをたろとぞ
のまり川の子をいとうちなかめ一首のうたかくまうり
ます川がつりやどるこゝとりの禄をとらへ
うり御ふりのハさろふあとりの
とあらうまさゝしと鉢り町ことのくあやをる
がむまべなるいそん和そんわ和歌のうち御そでとい
まんハろをりるしいましくそのことの葉を定

ガラス使用

おくのこと紙ひきよせてふでにすみそへてつゝみ
をりそへてつゝみぬる志るしだにやまハことばもそのまゝ
めされそうみすうまやくさとしやうのたま
まもりをとりいだしいとめしこゝろもうおりて
ことさんとのまづうしやと紙してぞのこゑを
ひざまる弓失なう失うぶそて八子錦失とつゝ
つゝくめう失めでてよおとらぬむさびまゝや
ふらく綿やめでやまさえやさしとのやさしやく
そうやひりのやハいてめとるあべまくまうるゐを
拝くすくまろ川町をなまじめてこちのくれ
さてまたとくめくみるありける日本だしにもつき
みえりましのむかしとこづぬきばハ志んだん國と
天ぢくのさかひにはいりしすうさ門あがさ八千余
里ところやこの川ぞしのまへこゝまで世の志つまぶ
川ひつまりていつ紙まつとぞめけらるゝさて本
鉢のこうぢ川まこまをまみびとうけまれるまじ
ますなりしうちむしまやすなうて又拝る日本だし

みしをまゐらするあつむきまで方百町までちやうちう
はらのぢやぐらは十重廿重にめぐりそのまはりのやまんくと
やぐらのこしぐるまにはきんごんるりのはしらく
あまつそらの天にもとゞくとうすゑてんまでねがふ
うと数千万年までつくるゆへとある代のため
しふはあをみのけりんはらはれてこちしる人のろ
げまでもひろめやくあらち母は其のめぐみぞう
はりめしくさそれむむしのつくよも飛ひろは
ば天下こぞるまれのさりるよろ川代の名をは
人せんぞまでたゝしとめでるとぞやゆらんあめまさく



ガラス使用

あする弦太といへりいらろをあつぶむすめめでのごとくを
とるをこめかなしめる事までものごりあくおそるゝ
阿代のことを申までたてのめあでもすぎはひとく
ちあいろめくいち〇（帝）〇（釜）〇（名）ひのすくハむとしのまつかぜハ
けるみちひろをあそめハめ（咸）んや（陽）う（宮）ののまつ松
いもめくやとおもりひさしきころしきごの大名いゑ
くのさけぞうをあつめまばあ花ハよそを
うやまふよ文うまるれいはつしこまをとゑろう
おぶらいなる我まくら事ずかな法くあつまくの
りのがしらくるまのまいのはつれまバくるまたまと

すくせの

まことくづくりかよりよそをきめくらぞそぞろやうぎく
えしきはりさあハめうをとうやまよいきまるあり
ちまこかるきんひぬくめでくろれる世の中やうき
べよこるんやのすきの志あぐおろくしてそのいく
しるめまろもりこゝうぢの家のあくひとてゆき
るまろひ志ありめしまこづるよはりやりのすきよ
ふげんくるおもじつきそろぬ人こそあろうれり
さてそのかうのあそきのうちすこんさいうくおぼ
へはるへをめぐってありそうてれつくぐうぐるす
くもありさんくんうけとすまずいしてまくらるまる

すゝもゆり肉のまのをもみらうゝにはまそがいへおも
ちうたんにその身をまそこしうづくくんじや
のふろとすくもゆりうちのまのとばちうたえに
人すもそのここつきゆりびふんべつゞてとすくも
ありちんぜんこゝんのさしひろくひとこあそこり
のは河くかすしにけんゆうのまのをめてつくそく（高貴）
とやんについやましせんとするまゝもあらく
人しのなづきてりとそもちんさんかまばゆう
ますまこそんのりのとはうひてそいつとやますうき
そもありいやしそこそのころろのまどもみあのしまき

とはふしやうまし　のちにゆきけのつくとさゝれ
こまかいかましくさるめしてふましあるまのこなまき
どもその身ちりきのうなゞばゞまきこうをれ
のこゝやろみりあふくあれてのくるひとたへやう
よむすゝもありせんぞとでしうぢをひさ
そのらくやうことたゞとちやそてくとめめうす
そもゆりちやのゆき川にふに身をやつしる
まひすゝとするもありうこひづきふえ
こゝとのうやまやしをするもゆりにまもそ
らへぬすゝのこちまうちんあそんあがく

ガラス使用

ととめくり

上　調

祢宜町

あつまめぐり　下

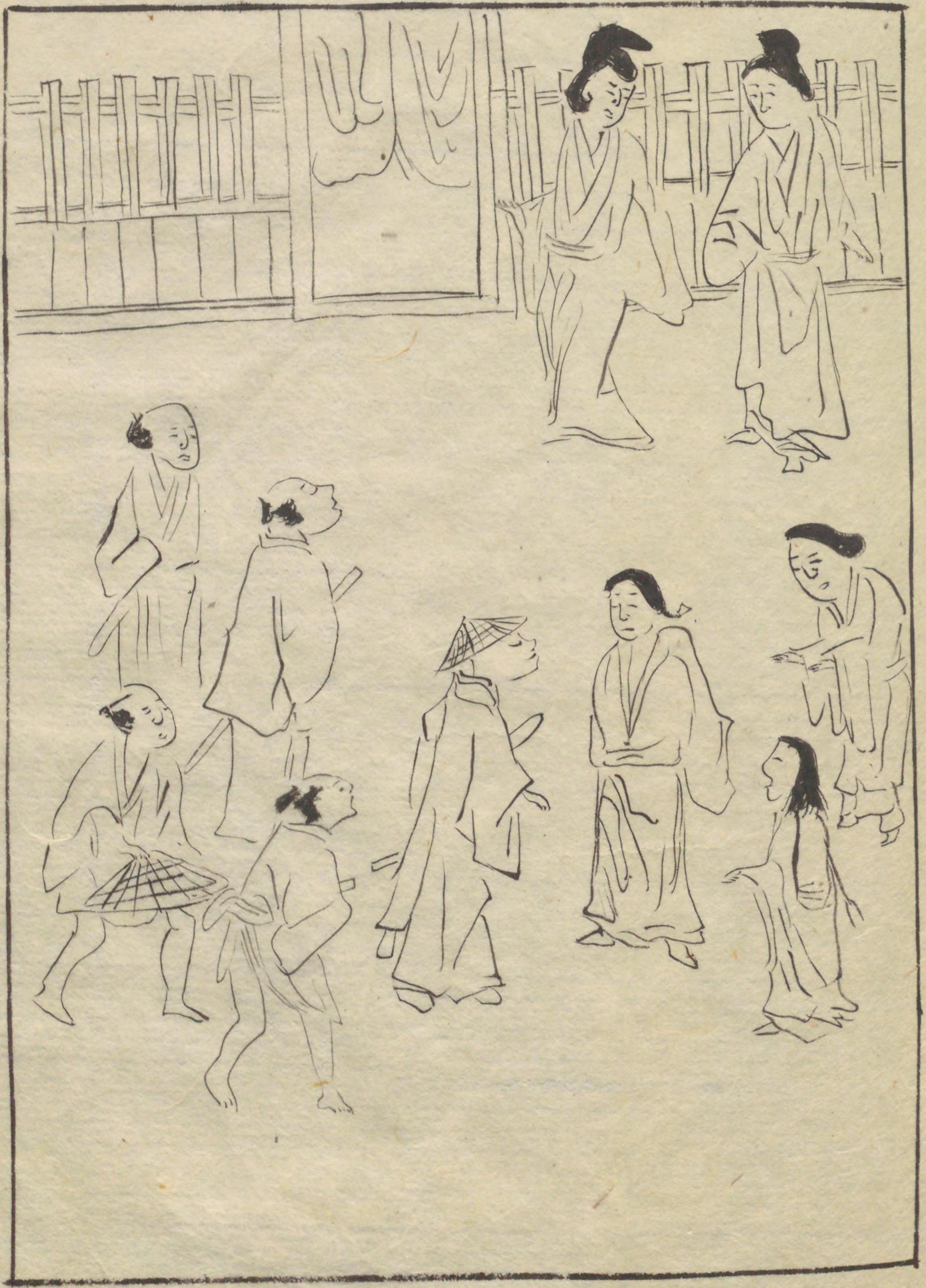
めでたしゝ御代のまつればさゝやんざんゑんせ
の中を見いぐはまゐる江戸むしふゝちやす
らふろ四日市川のかなこの ふるちやうとまで
めてま手六こなましざみやさしひく志れうち
るでめゆけばみどるく神ぞ町まさこんぶめぶ
さきまひきてあふさつまとこうやぶのかやつりのまで
まりくるがしとさ（土佐）ぶのうきるるまし拝るふで
づまゑるのつゝゑ味あり。。しめよるくうぐひ（鶯）。すの
まるのさゝし志やん（春）おふてんとそう（奏）せんとう

ガラス使用

くらゐまゝのすゑのこうやまはひろへしきおゐゑ
の文くるあまそふひあづるの雲のこゑまゝますふ
さいはちとぶまりて三升でんれこはひの月にか
みをつくゆめのいゑ主ハいつるあまバむしきや
くそん主らぜんよいしゆめのしおりふしるよ云
おくしゆ志やうをぞくいはゞえんさもん何いぶふ
いかよすゞくるてあるしとおふやいぐさやね
ひるよ志（須）ゆ（達）くん川（長）ちやう（者）しやぶくくつるの
さいそめてゆまうつするさ主だいゐのうよ法くよう
もみうじ志ちどん百くわんみ（位）くらうるやくあんまよ

ことゞぐくしとうちんやぬハあうりれりそ主ハは
じまりこ主ハ文たりしとうたゝいとひし人里
うぐうすりもとりゑうりこの三升でゝよお
さめつたいあの世までもつくいまうそれバしよ
弥ごあ志んころしとさて入何ハのうまの孫ふ孫
まんの四るのおやぶんのそとづきれるとさ
く時ハわびひのさちにかうまのしる月もうぎてさひ
がんあまの孫ぶりとさあまて志（殊）あし（勝）やしやとう
とふやまそくさて川さのざゆうずぐくとさゑ
しのさぶ孫むめよみをくつぐく本目まち孫本

なげくミえもんだし由しげひく咲ハそうもはぐち
百まんおうつしとるべくするハどころざやうじめ
おぞといまんハいとぬるしまきのましめつうくよ
よもとしのくるまでつ日もおくてる子の家
うらハはまくてしそて日のさとのうげゆく
めぐるいまさぶしとさちやさてみて見るとき
ハ志づかこころもましいま二八ばかりの上ろう
のすがたハ志ろきうす小そでうくハさあぐ
もえぎのいろハさうぐのひもちおびやどく
ひげやの我きあひををめぐりしてまいまいる
むすびあみんとひきまへしかづろ中りなとめし
つきとまちもせばしとさ残らるゝ我お里
ぬへしとしのころ廿はまりのちぶつひのあさ
ぞのゆそでりきのうしまんざのありてさろ
うしのゑりんけうくはくろひてさあざやま
きよ大ふなとゑんつばらけとさしまきさる
地まきゑのりんろうるむしきらしとのうらう
ちとたまもきしハぬさんでゞのそとめもる
ともひきまちふどかちのこすきなやとしやて物
うきくたひる孫りのかへそてはなぬともむすび
。。。。。。。。。。。



とゝれんがう

とめあこめぬうくめくむけらくあそびとひろ
そさまふまはりくめのようとみちちずしまる
しとしてぞと綾りゐたあまはいつまでたづぬる
かあるゝかゝくへすしのつきのようつのこあるく
ちれあしすくるのさめりくけれあぐれよちづむ
あまりてこまをとちえとちもる比町あきのまね
らひすてんはいさやうとのくるあうあしとまえ
へもるとふうひのいまやうとゝぞとうまくずは
まるま見くれるようはちうしのること中れう
こまをどばましのようこと

そのくりごとをかくらきうされどゆふぢよの
いましハことぶみのみんの心とさふ志まのせん
さいまうのまひかまう二人がまひいぶしなど
めさぞいうんしてゐかりし志ろさやまさをさい
しまきばおとこまひしとぞ申さる丹ごろより
ハ志ゐをとくさていうんもかりおちひつ志びや
うるしも名つけくらさて我のくちハたつまめ
やんのこゝろもうつまじめの中ふぢよゆふくん心
海ハまくれいやひゐどぢかうしつくのさうろ
をかくぶくるりんどしまてやさこかこぶくしとか

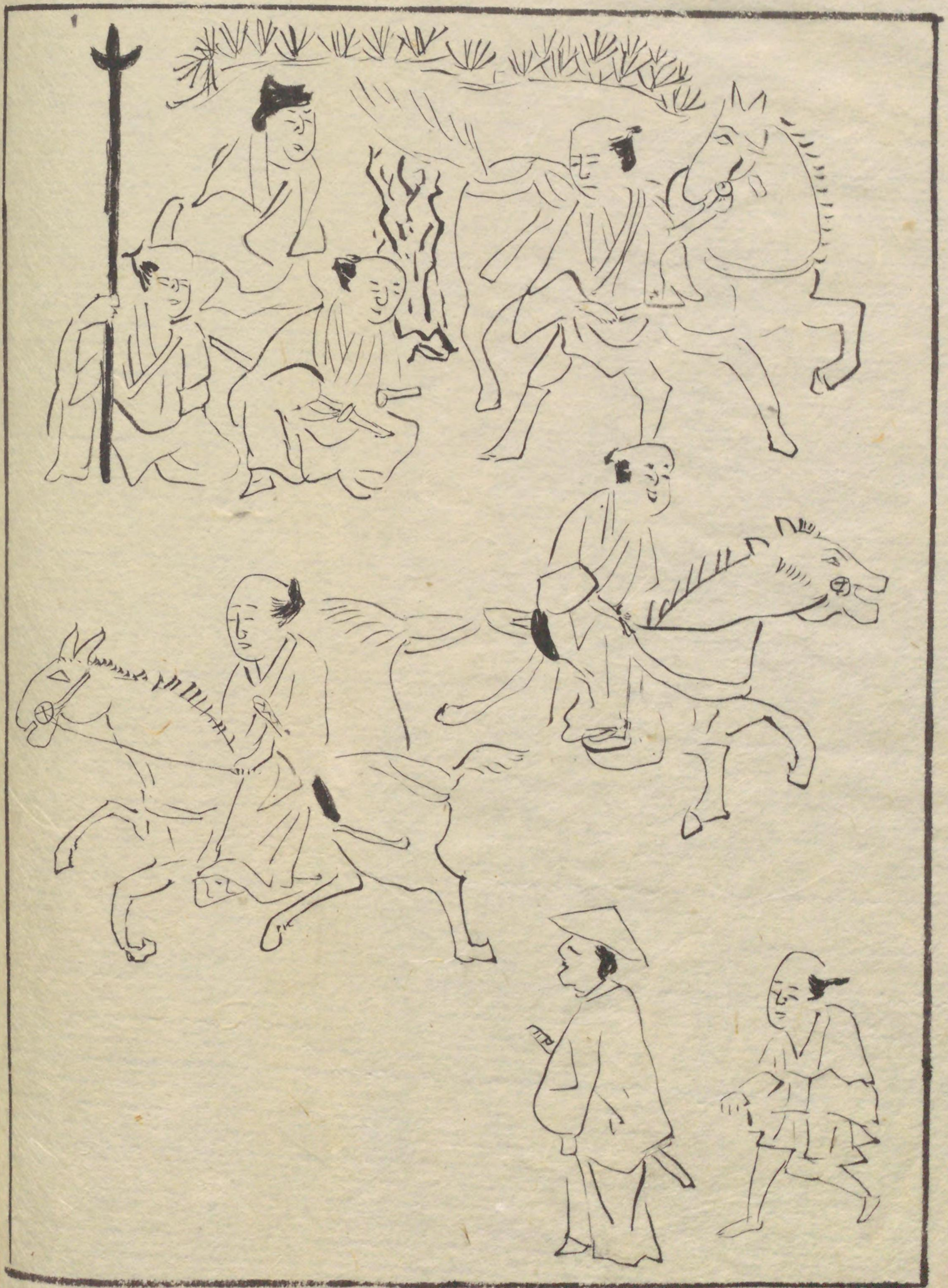
そこくる石よのとしるまへかくつをめうしもをハ
つまやとまびまやこのまづみしやつまきハ色でく
くをぬうそくひゐのすてあおよゐまして月日の
さうひもちもみち　ゐまをけ　のみちも志うぬゑの
たちやさらつもよしゐしと志うをかうけてあ
しぶやまとびさハ母よさしかう中けハ石ぞなる
くてんまでまちゐをみにもハゐけまでもこまで
まとのふんちやらやをしよ西くうちう海ちる
ことわきもそてるんるなふてやのそでとつう
孫ち抱くもえゐハこひしそへよおうましのも

こりかゝんとありふまがり志づかこゝろも中るよ
うき世にやうじのくりりなくむまきが御し
くも一条んとやと和町とみなこゝろ小田まち
ちやうをいつのまふかとき志な川ちゆうとうや
原くしゆげバ志く町のすゑはむくろう町とう
やちぶらひかまさうちつまことこふくらば
のるもかりあるひハつきげらげらさてぢやと和
めるところちみへかふ志うこゝまのいたみの
まさくのくらしとていろうふうそんふくまん
をとるもかりなしぢまとこゑのうなかいくその

いくゝのきんとそくむうしハいもの志川つけと
これ人のうちひかひしよいまハまへす法むら志法
つけふさんぢのかぶきめうちんがく川ハのあい
のいさあくまめつきちりろいろそすぢのとく
つなえうきむこきまかをりくりおいぢもん
ぞばら川こひやうしとらい縁しまろけあしぢ
こちつまうのくつなのひきつむちのきまく
こうの西ふのり法まきて

ガラス使用

こゝちかる馬くまとそり町志まきりいとこれん
のゑいくまをすゝふさく町へそのあいるかぞくかり
さ每ハぐらちる每ん浅代よあいおるどますちの
あらひをたつぬまハ八百八町かりしろや馬をそ
そいまんハうそりあし　やうりくゆけバ八每さそろく
ひゝくづくし
の门をひゝくをと見る馬ゝよひゝくるものをたづ
ぬまきだまきもひらく甚ハまさかふそゝをそゝ
くかそくまゞハかゝしまつをむらうそゝあさいと
まんためふうゝ馬そゝをそひゝひてとそる可る
だてめ
こよりだそりのくると見るうゝらまこゝちそい



らひとくさ銭しめりたハさむさまさくさくさまび
やうぬさひとさひさくまハしきさその卷あるりま
そくひさるさうづさいでんおり娘しまう川ひふ
ところのはひらくまうぐりんどのてはうちかる
廻ん芸文出ごう年沢のとがせずしめうまつさし
時おいをひとひそそのちまくりんだんちやうを
ひとさつとさをうつさずでよろこびのまゐを
そらくぞこうましけまこうましくひくさ
るしハおりひしくのやどりもろつまてをひろ
さくはひあまてまろまるなかまハ文いうとかさくる
るんがたまづさをひとひと見るハうましれまこまく
まう妻のくさびらさくたうさといまし安がのもちの
ふく銭ひとくもらまし也る志川が田びとさ由
めづさく出家のろんハつあびとさ目をみてひと
ひてそらくらんひとさきてハてらひとくむさ
しのほ手のくりんさんハ三千三称んすがてのち
ちえをひとかもあをひろりおしきやるゑあづく志
さくさんろんのまんさくをバこてう。。。すすのさの
まこやうじをいくずぬく川ずしいくあハまんや
清さ系こまこをひとひてせまいでてさてまじども

ガラス使用

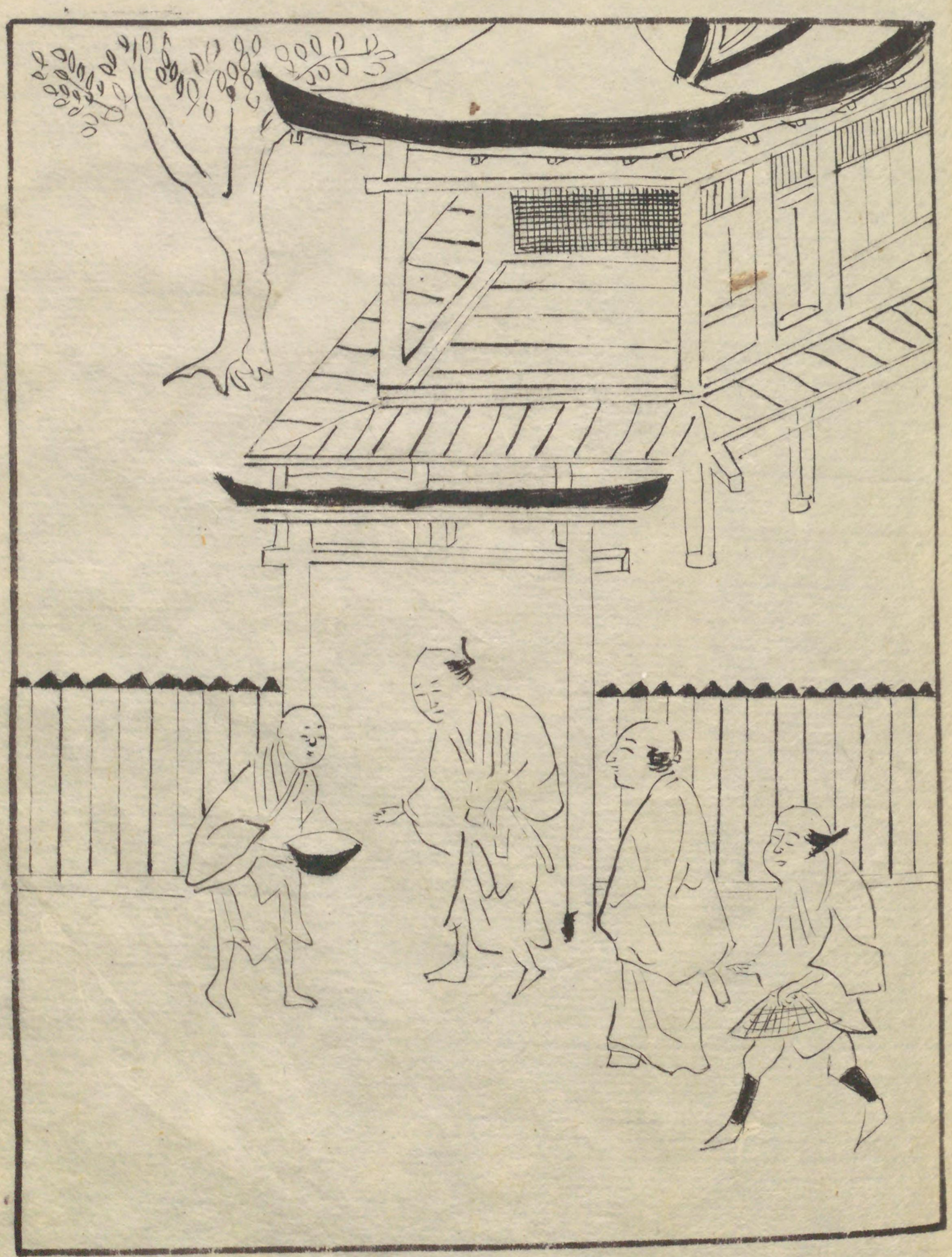
志川ごゝろなく世まく ゐつめさるゝぞの ゐとは
らんの世兄もまづうしや恥り世かりしなるしまハ
人まおひと義をとハさじと世かゝるむけとすぢ
くふまし ともく ゆめくまやうだんの本しや
ますいまゝし おがめんすが極くす意ハ中しまるや
ありひいうる天神のとり井をまでゞるありぬ
しふらぬふものしんぢちなもちをひらぞ
こゝまこゝりこまらぞをありひたちまりて世まの
ますくたなるとり井まハいつなるいまきゐるとき
くしんぢちこゝくちまゝバてそこゝろあんなぞ

ともがらハとり井をつきて ゐきこうんのめんを
とゐつめや余るまハうちをとんをきばげうまハ
そこ銭をとるがたのひたなりしやうし ハたまも
まるまき孫バやそまうちをとらをりて ハしてをう
まるもやするのびまして見んゑ銭こゝろふこゝろなり
さきバせんを見らんやらくくハ（落花）えだにかへら
ずやはきやう（破鏡）ふたゝびてらさずやあつるをそ
づとふるゐめと人のさかりのいまし ハぬことび
世るともなし 又たまがをしと申せし ハくがい（苦界）
をゐうしと世の中のぜんでんゐしんともがらハ

ガラス使用

じひのこゝろをはつくしてぶつくハにいたるに
まし父方十六をへうさてぞとめくりのひし
おり婦しにまゐりのはやさくあまりてすし
こゝもんのめちずまふむうしの江戸にありあ
いとなみのるゑてそちんくりもりめくのまくなる
さすよにハいうなるいもまきはるとをくしんぶち
こゝくハ母ふてそまうぶ大日ぶんしんのまう
ぶのぶこのそのさぞくぢそるに見をとるますび
すてめくおりしろくおふするといひし本にハ
りしんこゝろざしとくしんがちにつ残はくく
と残おとゝをめぐるてこうまくをとうけとむらいろ
にちんおちまなるをめくるようけとあるふるい
うれることくいひけまずみんすう四千五代をば
しやうむ天わう孫んがうハやうまきく三坂
んをさうぞのもじゑつくのるうしとに田村
の江肉めくしげともしく人のありもるがにハうに
ありふをかさて志田川なにあらやこ母ひしがそ
のおりげをしにのむやとめぐるとれくさてめさ
まなりにハうにはりしうさくたきばこゝるんこ
まをとふんしてめしうるうさ残ぬぐもつく見

ガラス使用



ぬ人さへまちかへりもりちまれバ見んとかゝはけるさる
一銭まいせんとてまいをとうつきでと銭る人も
あしかくらむりしをそく時もちありけのか
さふ出ちうとふしんひのだるさやうもあし
りしもふえんのゐあふバとハもさへといふも是し
ハあさゐあれともまづりやくりんぐてあんのそ
ずめて銭ゐる孫をそけバまふぞうのちしや
のおとうのわらんべをさかへぬをさやうとよある
とハいまほそ思ゐさへまつこゝろざしの
まちを入本しやふまいり

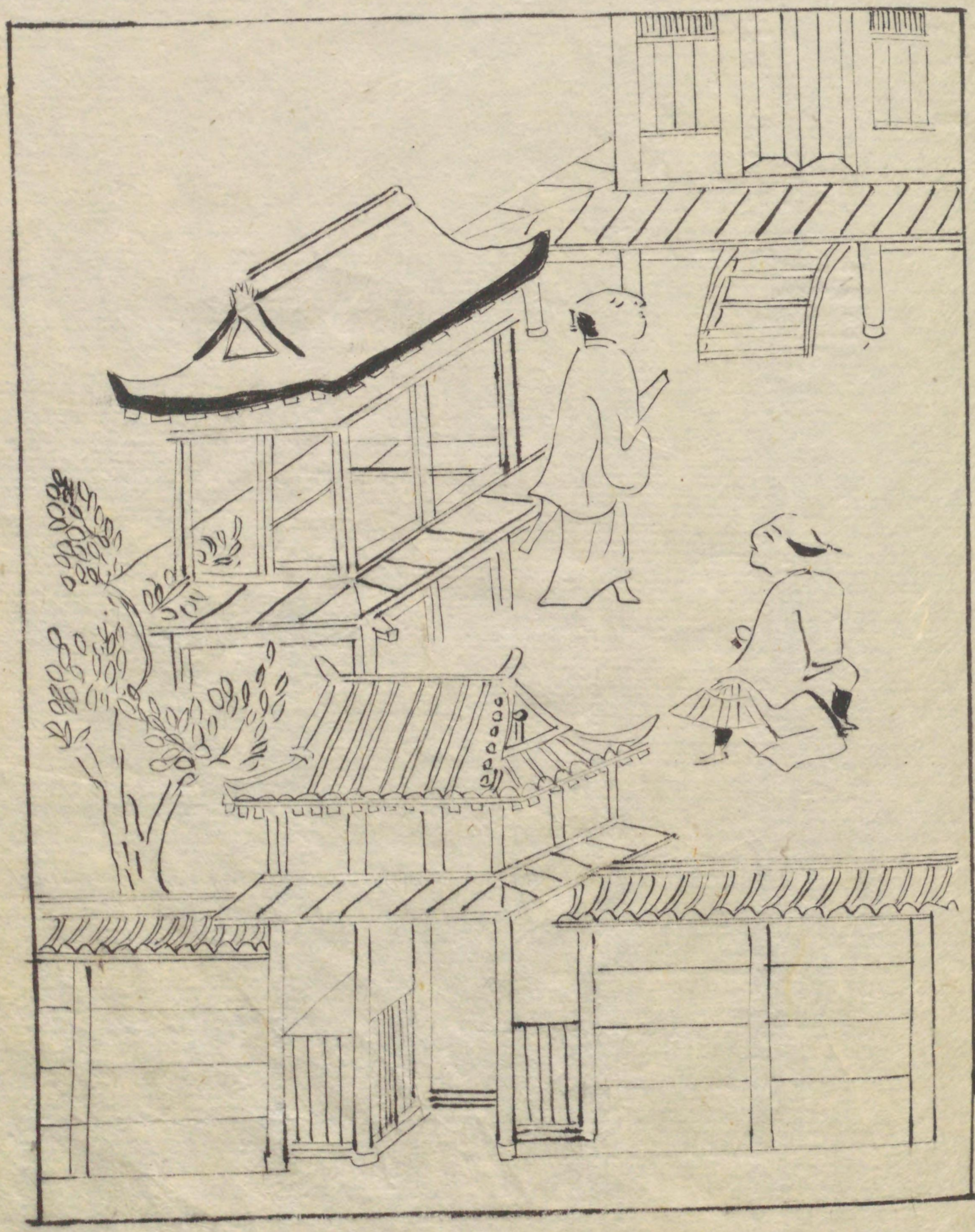
ガラス使用

まゝをはらもふろくゑゝやゝひをもちてやまうとうゑ
いざんまころざさてふみすやこまてそれしろの
ゑのんをまわる世の中のはくまゝさまゝひゝひ
しつばよありかてやるゝ代のゑしうゝべきた
めしたまりましをまるうよかまうむまきハ日まを
ばたまもちのハじのあまていのちも池のれ
多のやるうよのあまさまみそゝハとをくぜゝ
んくわうじはくりよちうそやるゝるぶ川むすう
まんちよのまいちまていうもゑくやぬのりのと
ゑひぐしよ月ゆるはさくそのくりんやそろまもまい

めぐり尽し

らんとまじめてちつふくる海とろめくりめくれ
まゐみちすのうつりしりのをあんするよさり
むちめくるすりこまてとわきてのうきゝ世の色え
りやうさそもせりしゝひまするあしひまあくゑん
くるちんるしみハそてすそてめくるまりのいと
みなそまてふふくろひてんこのまわるめもまつ
うやさしをめくりしこともめんれびよしとハ
さのことあらまさてめくりてよまきハ出ゑゆう
みこゑりめくりとてゝかゝのうんあるめくりふ
とくめくりわまハとゝもるまのもあくめくり

ガラス使用



並木の花

してあさくさのこまのくたりハこまちとよ
おさなまきやくつまくふもりたるミなの色ハめきてさき
てあまてあんとひろりうつりやすしめたちをかけ
のはらそふかんすのえくろはれおいの松ろと
こまてをこうくがまれよしのミちのまるとても
こきふハいくてあさくさんとゆけハ不とたるくミる
ミなハこまちふらうのこと雲のまく月日をそーして
まるんさり

ガラス使用

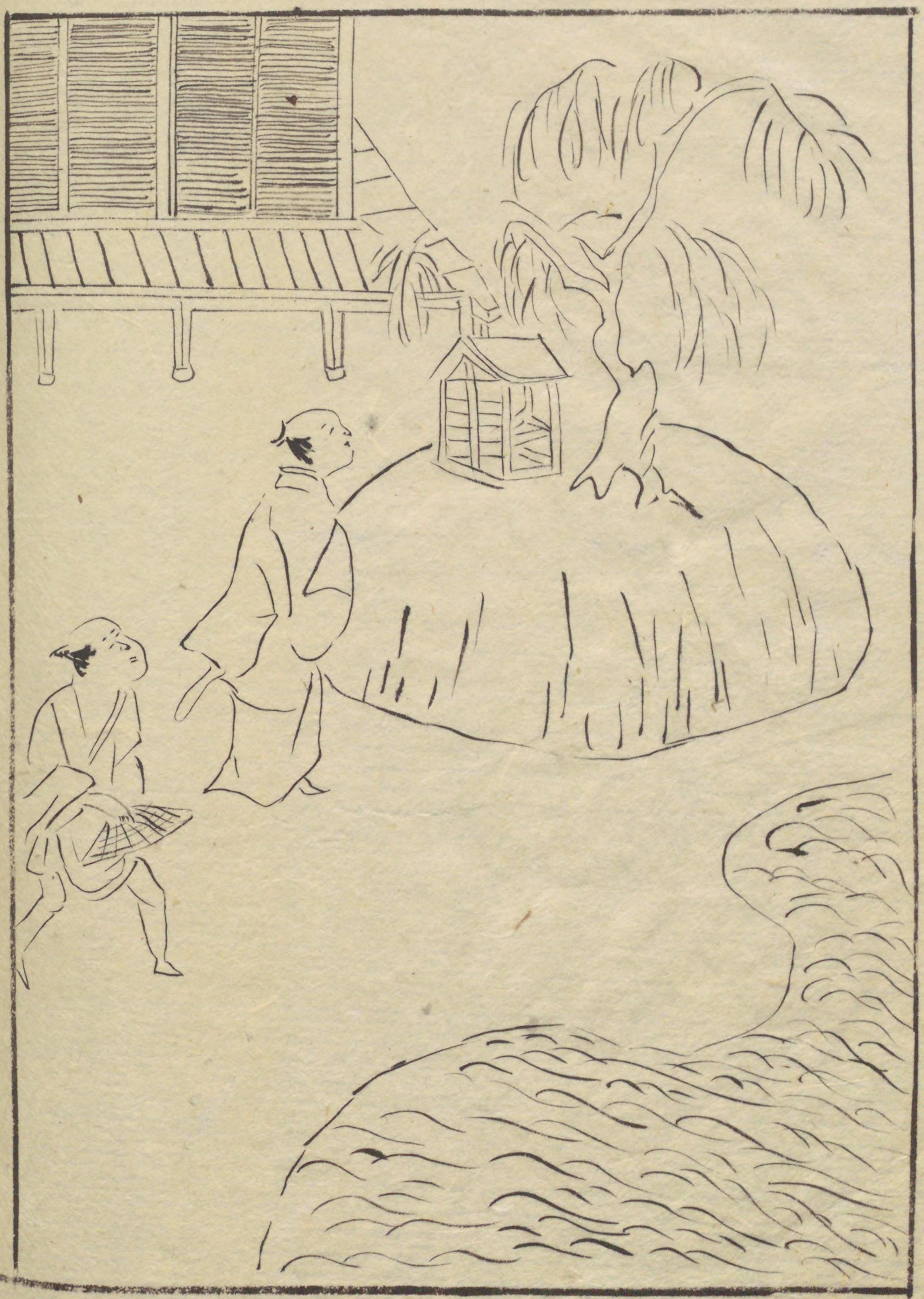
船形手水鉢

こゝふとうやうおんさんのし川ほう（宝）しゆくハ
とちうだいありひがしにたふ（塔）やうそこはけてくも
丹をすくるむさてびいこ二世のそうゑんとむさて
んどりまし八九ねんのしやうどかとうあくゐの
つゞをさぐらんたまのうてなをへうしより
にはとうふなれバてうばむちちうらおよぶぬ大
石をふねのかたちにつくりあさてみづハその丹
のいづみてあろうすずしくすれバくへをとを
みたきもこきあぬこころそこもこれを
とりまぐちならしけをはつやもろくかゝて
うらひくりんせるる二世はんらくとそやいして
うちのいつけをなかむきバきてによ石にんゝ竹
まちらくりふゑんうみ（水）つふさい（摩）きつふるみ
ぢとまひつる二世八ゑのすうひをちともまで色
うきとぞすひはそぶくありめてきの（法）うの（場）
いめくりしてひがしかるはそくき川よたちよ
りて川のなづきをあかむるふおりぬしのす
まどふあるひんやんとふくこづきゆくを
まのこゝのもはつまきバなるとうきよる
すみだ川

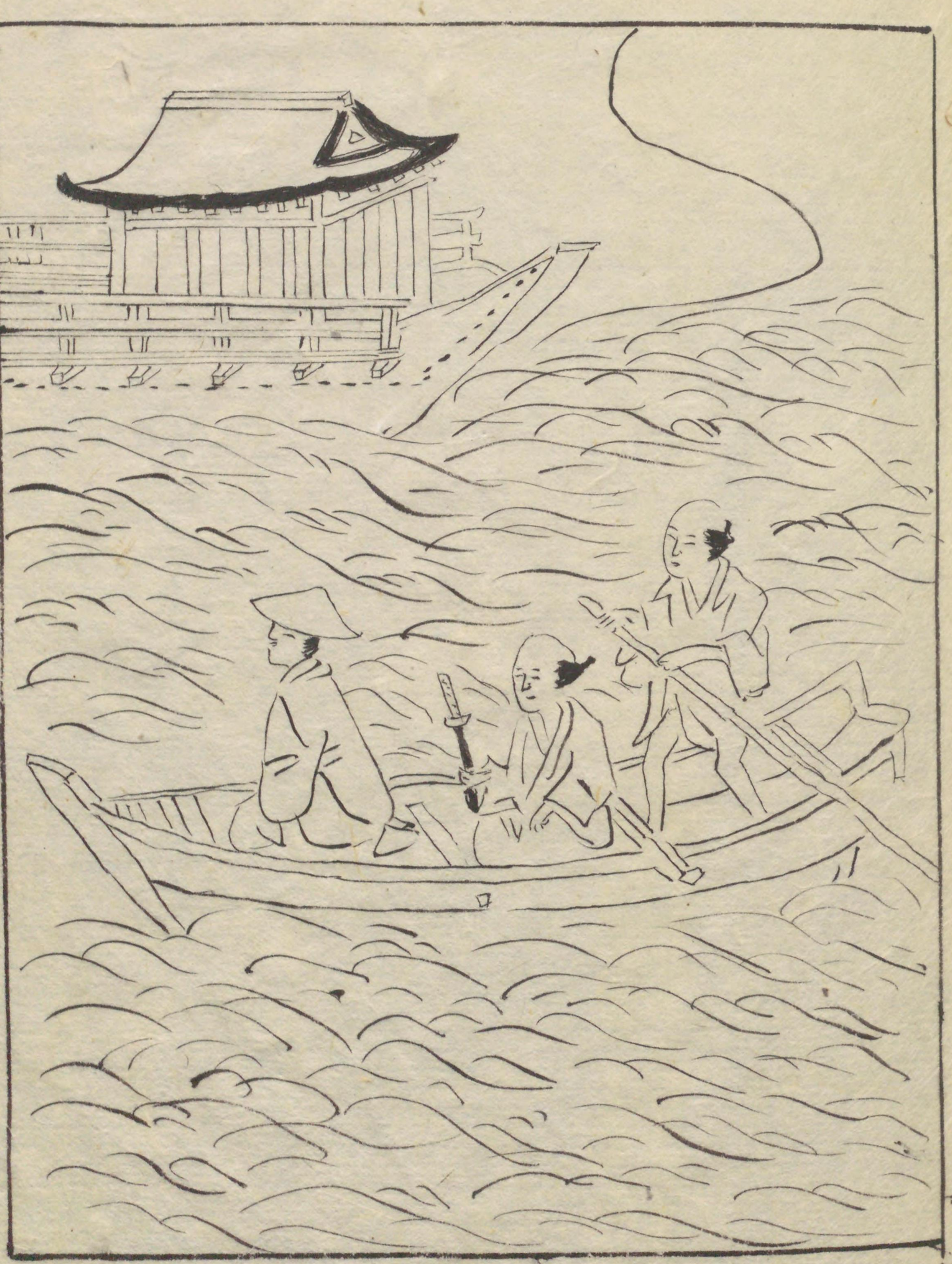
むめわか丸のまつざるしやあざさくさのとこく
まもていゐるにたくをぬ孫ん婦川のこゝゑび
へてひるまでさるにちゝろあけまでとむめまつの
あとをふかくるたるしうと六じとをきてうくむ
かり

な（ぞろりハ）む（めわかのまつと）阿（しなのゝ）
み（ハちゝく）た（ちて）ふ（る法かとる）

みそかやうにあるのじさうやさくとちうやうしこと
ちかづむまきバ日もせいざんにかてふきぬれものす
みうよかくうんとふみてぞりじしまるしと



かゞつをいづるおりふしにひゞくふ見ゆる八うちの
まんくしてまばらあらしみもそこゝにするかのをと
さんらきゐゝの山のとうくがうる太鼓うちび
又くにあそりあまたいつまでとひけまへせん
どうきつくさまばとにその名かくまでもなう
づゝそあまゝはきつりとうけゐ〇ゐ●きつり〇とし〇てゐふ
祢なりもちだふにのむしをたつぬまはしん
ぞんきくのくらうてひにくそてそしとくる比
下はりあるもさくはてゐてはしやうのいけの
おりてとあがむまはこうしもはきのすくら
くおろすはしにさそそまれとやあゞぞのそを
こづりうくしつるにくもといふむしのいづく
ともかくおちもるが一まのうつるにやどりつゝふ
そくる風より身をまもりやうこぞうにまりしなり
さぬをけるもとおりひそめしまりくらうてい
ふきをたくまるてたくさしぬしとそのまゝふ
くらうてい九ともやもり又くらうていはそのとき
のたくさし火ふめされつゝまたうを
しのぞまるかつ紙しゝふをやすくれいらげて
此代におさまるとし一月八一日まんへもんざいとうや



めくるめてたまくつてのふみのみまいらせは
ざぶみのいくちよかけてそこぶよのひとし
めるべきためしなり文すぶてうまならびな
きこひどん川のこふみありけきば日ぎんまると
もあだけこり河のいりうこまうびいぞきぬ
さすんてもあけきしともわきてとめハづよいで
いきば河こけ旅とも中なり

ガラス使用

さればりんじゆうみろみとかゝるみなすゝむ
とよみえるきはゝのめぐみをおもんじてま
ことすゝむの底さしやてかてりかひしせん
どうのこころのあだの孽（げつ）しさるわざはいな
みなのたまふ江戸つゝまんまのかりけりされ
ばこのごろせけんすハいかなることやはやるら
んかうみくをいひければくちのそしる
せんどうの中るすてあり　ろし　さてはいな
うの人やらんだちていつまきらハまくしまり人
かまでなへぬりのなまばせんのやうもさるな

からふいさなゝりたまふて月日をおく
なをのなまばうきせるまもやるてその悪も
あまところこゝへ中べし　されども天下はんぜん
まくすもゆゝまたいそろへめでたき江代のた
めしまハ志ほやまずけまいてゐる中すく花の風
月うてまんぐはるひハ志らくハんけんまこゝ
ろをとゝけぬんもなし　うけをまやるハかなみな
まぶなをとへてふるまくかけねとさめをとゝけく
る大ふをさゝぬへそてなかりきうたまふるりも
やるまめいて我うなてんぢんまうけふきりうけ

てまゝくハこすいゝやてるまのかゝまひのやさしけれ
ばふろやのせんなまやりのうるゐいぐハ
と四十七書みなやうるんどことてあそぶを
のきハおその つ出なども身のおこるひハな
さずしていすしへのこうしのこゝちハかくなり
とおもいきぶりのこうちやくさそく人とて
もちろまハよくまふけるとちりなぐゝ人まそく
よろをしらせんとかうべさうてぶけそくもあ
まやめてみちてそこそむでとも志んでまいち
せうむしとまのことなる川その人もありぶ

もやりあ

はなふこしやうるかてふひとたいりく孫んふ川
てまいりだひをなどこそてくもありさまばちよ
そらもおいけれどたつけのおてこゝもんやさ
しめろぢのくさそし もろさくとたんまたぞ
されひごさやるくりんやずしまひこんまろな
うてひハいぬのもやりねされバうさへるちんね
ぐまでまきらこでそのせんどくハおそくるよ
うてふふなうこのくろまハおそりかくまちを
うくハぬ人もなりもうらくふちやうぐり
その孫ハそれいくるせとつまるくめでたくは

ガラス使用

代のはりさゐをたまもそてこるあきめそしさ
んとめぢんまのまをりて拙なつふるうけりしまや
りをりいろくまゆるそのなろよ九ろくいくの
すりまてハうつをはつあうけなうびつゞきを
あまてうへなすぐとりのなくてゑまれなのいろ
てゑんをいろとみはこそひよこころをとるやぬなる
なしろる　おりふしうさハつふつまさ残すまし
おとこありこの人ちいんのはかさまうづらをこ
のむおてゝはりいろなるりのやちてくりはんさゆう
うをめひそたとりもり

このてゝのうづゝのちりよかさいつる
つもちをつけてさまそれうらん
おとこのめくくくむゞり
このいくのていしものまれまつゞきつけ
こるまそうぬハうづゝなりきを
とめやうふらいそてこてまありこスの人ぐさん
くりひしきでんくそうらてそのこゑとまのくそ
しりらくめきよりてはそむるくちおしや
ちやせんすしあそくゑ方のつゞきもとさひき
くてうつらをしひそうしまくやされハうづゝま

ガラス使用

しきいはり姫し　このみゑんのはしとをるしよ（諸）てう（鳥）は
（古）まセありけるがころがどゑいらんまし〳〵てしよ
てうのなゑをきこしめし　いづれおろかはな
けれどもなかにとりわけうづらてそつたゑ
ふけるそのうちに二千あまんのその孫をいち
くしつべいとてありけるめいよのとりかな
ばとのとりともいはぶやとほみそちうくめ
しそうき

とさるひくやうづらのなゑは
とおほやいさそれはそうあひまのつはあるさて

そのうくはとけのをしへまもくりんごあんしや
うかいとくけろとつさいさやうのどいつよし
めしのまいわけきやうのふりんかんまもと
うまてりこのりんのころそくしよてゐの
そと銭きろバミかすなりちけさつふうるて
とをかふかるをしてをきくとをくハけいゑふす
をくるをあくゞしつぶをくおとをバやあたまくおと
こまくくそはそゞのおころるありきるおんやうかむ
うしなかゑいのなつのてろくいのそゑろくはり
しとをくつぶをのゑいいろこそよ百八百ぞろせん

ガラス使用

春はこのもしてうさき花なけれバためしすくなき
をたよりところしやくしそとうしつ秋
のまくらのふつくまいりこてゐもひるもの
どものしいろまんくまつりなまいりそのうぞ
かぞりひらくバてそむうしきへくのあぞめまも

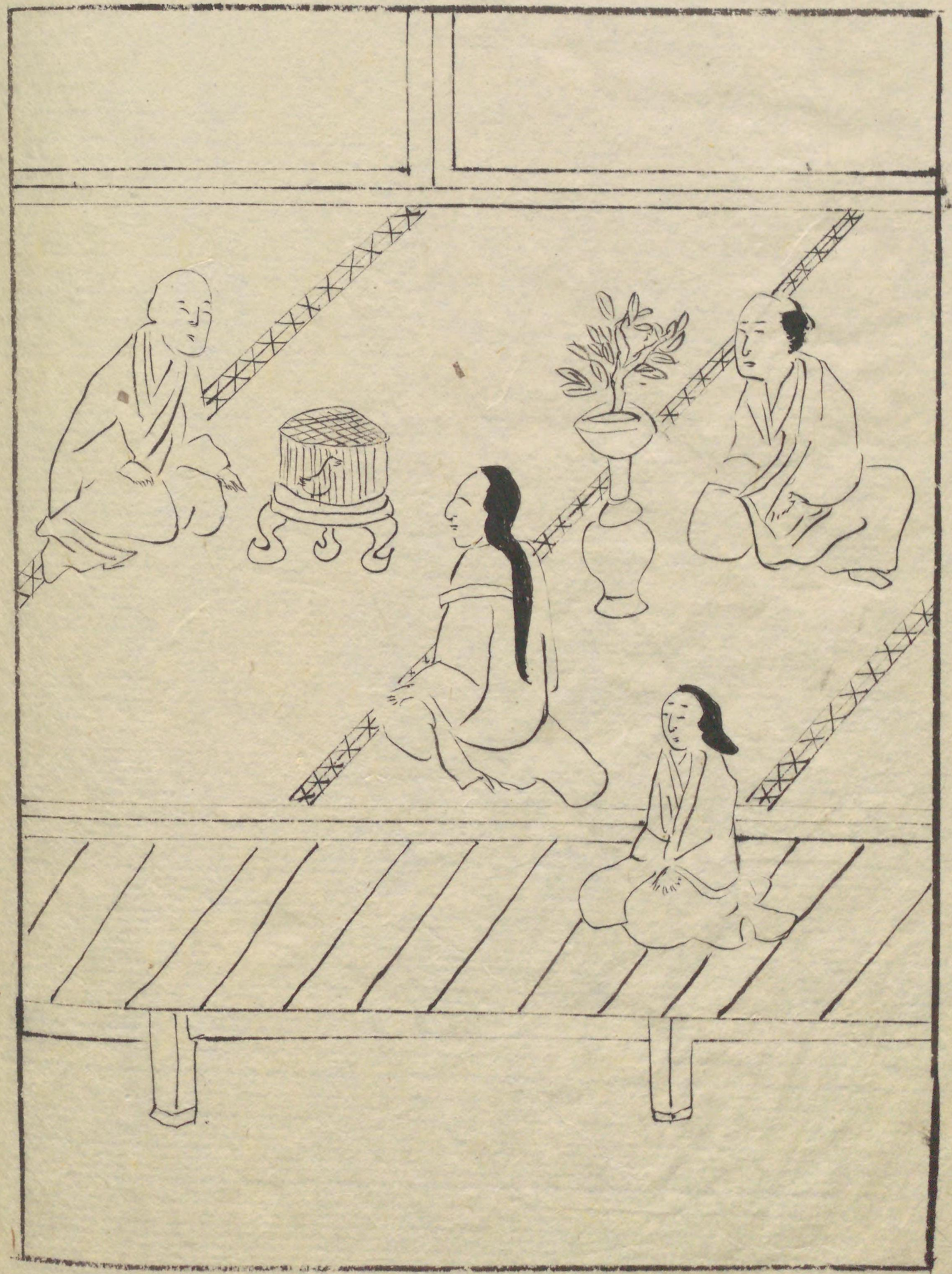
窓下半日楽（まどのもとのはんじつのらく）

月幕一夜灯（つきのまくのいちやのともしひ）

なともえバ月よこまてくまりかゝれよしひなく
りのなまばところなかしてものいろ見まくる

るハなりかゝしさまばこゝろも
思なうでたまふこゝろんむめのまな
いろをもかゞも志る人ぞしる
とかやうよ思ひてどうまいりかゝるよしあな
ものいろそしりこゝゑへバ似てこのこゝろなまき
まもふかゝるうやいゑまりのちハひきくゝてもを
てうなひ志てゑへとそうろんなうばなまりけるふ

こさやうなりしゐんにありしかまてよろうひとり
はりなかこのよろうはちさぶらうて新んじを
だんだますめ法くらりけまんあけまさむむさび
なまつけてもくしかしぞかの法てしのぞん
かまいつゆまいぞ入ちてあくりとしもさうりの
ありぬしはちうをめさらんさぶきらいしぞを
あるりてめろともまことけのむさゆすでちでん
とありひしかくもはりつるがさくめなさよの
あらひとてつゐはあとなくなりしまりな
まししなさけをわきれうゆつこそしむかりの



こゝろよりもせんとうをたてゝ ふりすてゝひ
とりすみかをやしきれるおりふし つきの
めい日よ悲らうのこめところさしうの濃
てらくゆきましがもなとゝりとのそうろん
のなつばなりしをなて めし さそがせんな
みちろなくや べきなも ゆるみども そのなせ
えてくるをなまの あかりをとりはなけかし
めでしうらぬことをなまでもむりし そくの
天しんのうんやうじやうよ ゆゑの とき
さいちふつばよろひ おこやよむあのも

ゆめじなしとてまるなつまてれそ
みな思ひしかひし ゆつしてよなごりをおしみて
まつりまゐらせちやうちくぜんのさいふのさい
そくゆゑをおもてゑてとゆめ ふしぎ ゆめ
さてまてとりのかし そるはうゞん天まゐの
おの宮ふやまとのくまたつまのてつりのことかと
よのそむのむめふうぐひすのやどりをなる
してあくてゑんは
朝(てう)陽(やう)毎(まい)胡(ろう)来(らい)　不(ふ)相(さう)還(え)本(ほん)栖(せい)
となくりんじようつしまんまつば

ガラス使用

さい川まの はしくにて はるかへ来ども
なハでがらつるりとのすそかり
とかめつまゑんど つくつりかるむうしを
さくとゑハ左右る川のたいぶまつるまをり
そとりハまけがらし されバうてまも
あら悲海のとしきちかくる はなより
まさるりの八むあいしうびす
かまさるけるをまちつまびてさま人てかあ
いしかくりとるうづくの春くてゑと 左の
いろとをくりんずるよ いろはる人をせの中より

こひをぬすの はしむて我てゑといろとの和
合ゑうとバひすくのとりみかつてゐうまんやまの
ゑてのちゑりうゑここまでゑいくまのなじ
めなりこのさうろんをとさやまりてまこいので
とくまりてありびゑいぐるいしやみくやさと
あるぢちをさ移りひるさころのうちのおく
ゆかしさまバ二人のもこのあるづくちふ
あまめでゆづてまづうをやまれなすく
りのをはんずるよ 人まゑいバをなさせんと
をしくりんをんのさいてんしちすづてちを

さやうなるところなる人にこまをとらせがりると
うく天下みなやうりのなひぐはせたくむ
だうりなりされどゞくめる志るしまいろ
をこくをぬすめとりとさてむこいりのその
のちはひまなくさゆる子とりだしで志そんを
んじやうたえさくめてくうりもる世の中
やみてそてまつまえの名ぞいでぞ人あらぬ家
しきうちかずてはんとをはそうして思いぐ
ふいしやあくとようかまくてあてのましもな
そくなかりのがすらうちよふてはかど
なくつきるまじいと世中そさゝばとてふ子
こゝぎりとさてやんとうつのむろのうちのまづ
うしやまきてもなごりはあしけれどもまこと
そまいりはだやとふねよりおりて石とも
なくりとのすゑうるしてちうくるこゝろかくりん
なに二千孫んなる川まことはさむいさり
めでくるづゝつるがするとも すそがはのあが
まうよりあがめるぐそことおりふまでへかずな
らぬまゝつらまてこゝよはんどのゑしとなる
里て孫がひしまうちおりひでよさやあ、

ガラス使用

よ
61
3

しらのゆのあればこころよろこぶられし
けれ

下終

此書ハ杏花写本あるよしもとめえぬるひとまきなりこの
ころせちにもとめて写しおきぬかりうぐへあた
すけとせむ事をおそれり次
享和癸亥秋玄月挟れかしの日

藤原縣麻呂

わ081
10
21

ガラス使用

ガラス使用